

コンサドーレ札幌 サポーターズ集会 2012



と き 2012年2月11日（祝） 12：00～

と ころ 札幌コンベンションセンター「S O R A」

107+108連結会議室

《コンサドーレ札幌サポーターズ集会 2012 公式議事録》

齊藤（以下司会）：お時間でございますので、後ろの扉を一旦お締めいただきます。それではコンサドーレ札幌サポーターズ集会 2012 を開催させていただきます。今回もいろいろなサポーターのお力添えをいただいて開催するに至っております。一応メンバーを紹介させていただきます。会場係をしております千葉さん。（拍手）会場係と記録を担当していただいております後藤さんご夫妻。（拍手）会場係、渡辺恵子さん。（拍手）会場係、松本ご夫妻。（拍手）記録係、鎌田さん。（拍手）熊野さん。（拍手）高森さん。（拍手）受付の松村さん。（拍手）齋藤さん。（拍手）進行で記録の録音をしております中川さん。（拍手）そのほかに会場には来ておりませんけれども、議事録を起こしたりいろいろな作業でお手伝いをいただいているたくさんのサポーターに支えられて、この会を運営させていただいております。最後に私、司会をさせていただきます齋藤でございます。よろしくお願いいたします。（拍手）それでは、本日のメニューを簡単にご説明いたします。プログラムで、お手元に配布しておりますがちょっと予定が変わりまして、このあと矢萩社長のほうから 30 分ほどお話を頂戴いたしまして、12 時半過ぎにグアムのほうに参加されておりました三上強化部長が会場にお越しになられます。今のチームの選手の状況ですとか、戦術の部分ですとか、あと補強に関してのお話を 1 時間ほど頂戴いたしまして。三上強化部長、そのあとまた違う会場のご予定がございますので、すぐ中座させていただく形になります。そのあと引き続き、またクラブからのお話を頂戴いたしまして、2 時 10 分か 20 分くらいから休憩に入ります。その後サポーターからのお知らせがございましたらその場で言っていただいて、大体 2 時 50 分、3 時くらいからサポーター間の話ということで、今年はウルTRASサッポロ（US）のコールリーダーの安中君にご出席をお願いしておりますので、3 時前にはお見えになると思いますので、そこで昨年チームが一体になったその雰囲気をかもし出してくれた US の応援についてのお話。それと今年はどういう応援を目指していращやるのかというようなことを含めてお話を伺いたいと。で、最後に誰かにコンサドーレコールをしていただいておりますが、今年は本物のコンサドーレコールが（会場笑）最後に聞けるという特典付でございます。そのような予定に若干変更させていただいておりますので、よろしくお願いいたします。それでは社長、恐れ入ります。よろしくお願いいたします。

矢萩社長（以下矢萩）：みなさん、こんにちは。（会場 こんにちは。）今年もまたこのような形で開幕 1 月ほど前に、サポーターズ集会を企画していただいた主催者の方々にまず御礼を申し上げます。ありがとうございます。今から私のほうで昨年から今年にかけて、どういうクラブの方針でクラブ運営を行ってきたか。そしてその結果今クラブが経営的な問題も含めてどういう状況にあってですね、今年はそういう多くの課題がある中でどういう形で更にコンサドーレ、HFC を前に向かせていくかというようなお話をまず 30 分ほどさせていただきますと思います。いつもここで話させていただくときはそうなのですが、通常感じておられる細かい疑問でも何でもおっしゃっていただきたいと思います。なかなか直接みなさんと、日常的にすすきですれ違ったりとか（会場笑）そういう場面はあるんですけども、込み入った話をする機会はあまりございませんので、せっかくの機会でございますから、選手関係とか契約・移籍金の関係とかお話できないことも何点かあるんですが、それ以外はすべてみなさんの疑問に答えたいと思いますので、ご用意のほうよろしくお願いいたします。それではまず昨シーズンの総括から簡単に触れていきたいと思います。先ほど齋藤さんのご挨拶にもありましたように、昨シーズンは、私も当然クラブ創設からのサポーターの一人であったということについてはみなさんもういろんなところでお話させていただいていますけれども、昨年は 16 年目のシーズンだったんですが、その中でも私どもとサポーターのみなさんの一体感という部分を今まで以上に感ずることができたシーズンだったかなというふうに思っております。特に夏場から最終戦にかけて徐々にそういった一体感盛り上がっていくということに関して非常にうれしく思いましたし、当然チームにも十分伝わっておりま

すので、昨シーズンは今まで以上にみなさんに助けられながらクラブとしての当面の目標であった J 1 復帰ということを実現できた 1 年であったということで、改めてみなさまの後押しに対して心から感謝を申し上げたいと思います。数字的なお話をあんまりすると暗くなる向きもあるかもしれませんが、クラブの実態を説明するということで、数字の部分もある程度は避けて通れないと思いますのでお話いたします。昨年は、その前の年 2010 年度決算で大幅な赤字を出すことによって債務超過が発生。その債務超過をどう消しながら、更にクラブの当面の目標である J 1 復帰をいかに実現していくかという、両方追っかける年だったと思ってます。一番わかりやすい予算決算の数字でいいますと、みなさんも気になってる強化費。トップチーム人件費と一般的には表現してるんですが、予算時に 3 億 8500 万ということで、クラブの過去の決算予算も含めて 2004 年に次ぐ史上 2 番目に低い強化費しか用意できないという年でした。強化費をいくらにするかということは非常に、ある意味ではクラブの根幹に関わる支出項目でございますから、毎年相当慎重に主に私と強化部長、後ほど来る三上とやり取りしながら決めていくんですけども、非常に難しいのはだいたい 9 月くらいから 10 月にかけて 1 回目の強化費予算の目処をつけるためのチーム編成作業が始まります。夏場から 9 月くらいまでの成績を勘案しながら、来年度どういうチームを作っていくか。その中で監督、コーチングスタッフをどうしていくか。あわせてその時点までのチームのプラス面マイナス面そういったものをすべてテーブルの上に挙げながら、9 月から 10 月にかけて 1 回目のチーム編成作業、強化費の見極め作業をやっていくというのが毎年のやり方です。ところが 9 月 10 月といいますと、去年はまさしくそうだったんですが、順位想定もつきづらいシーズンだということところが一番強化費を設定するのに難しさがつきまとうと。そうした中で翌年度の予算をどう組んでいくかもまだまだ十分に見当がつかない。その中で一番重要な支出項目である強化費を真っ先にある程度設定しなくてはいけないというところが、毎年予算を編成する時の一番頭の痛いところ。チーム編成がまず先行して進む。その後徐々にその年の決算状況がそろってきて、最終的には 12 月から 1 月にかけて予算が確定していくと、そういうステップを毎年たどっているということです。一昨年はご承知の通り、J 2 で 13 位という非常に不本意な成績に終わったシーズンだったんですが、その時点で特に収入面の予想に狂いが生じ、結果としては 1 億を超える赤字を出して債務超過に陥った。昨年の強化費については 3 億 8500 万という予算しか用意できなかったということでございます。毎年毎年、半年後の予測値を考えながら予算編成をして、まずは強化費から決めていくということです。強化部長はうちのスタッフもやった人間で当然経営全般についての関心も相当高いですし、日常的にクラブの社員に対して予算状況はどう、決算がどう、今会社の置かれている状況が数字的に見るとどうと、毎週開いております朝礼の中で逐一報告してまして、強化部長も十分クラブの経営実態については把握している中で去年の強化費を 3 億 8000 万台というところに収めたと。それがたまたま過去の歴史の中で下から 2 番目の予算しか用意できなかったという状況でございます。それでも一昨年の 12 月いろんなことがあって、いろんな選手がやむなく外に出るという状況がありました。生え抜きというかユース出身の西大伍とか藤田征也の完全移籍があったり、中心選手だった石川直樹君の移籍があったり。みなさんから言われたのは 1 番から何番まで全部いなくなったらどうしようと。もうひとつ監督をどうするかということでそれも含めてチーム編成なのですけれども、債務超過になる可能性がすごく高い。次の年の強化費がなかなか十分用意できない。その中で最大目標であるチーム成績をいかにあげていくかということを中心に強化部長と時間をかけて、9 月 10 月くらいから 12 月にかけて長時間にわたってやり取りしました。その結果、これは私と強化部長の中ではまったくブレがなかったんですけども、監督は続けていただくのがクラブにとってベストの選択であると。石崎さんと呼ぶときからうちは J 2 の中でも比較的若い選手が多いチームということで監督には、まずは若いチームなので、それをきちんと石崎さんなりのやり方で育てていただいて、更に結果も残していくと。3 年間やってきたわけですけども私と強化部長の間では中期的な視点を持ちながら石崎さんと呼んだという背景もありましたので、成績がどうであれ、13 位だったわけですけども、いろいろ批判も出るってことを覚悟の上で、石崎さんを続投させるのがクラブにとって最大の考えられる道で

あると。それをまず決めた上でチーム編成をどうするか詰めに入っていた。3億8000万というのはJ2の中で6番目から7番目くらいの強化予算になってたと思います。その順位は過去にもあり、各クラブとも経営状況そんなによくないところでやや圧縮気味にしているところがほとんど。それでも3億8000万を用意することによって2011年シーズンは十分戦えるチームを石崎さんとともに作れるという確信のもと、予算を組んだということでございます。ただ強化費が全てということではもちろんないですし、そんなことを考えていたらJ1復帰も定着もなかなか難しいことになりますから、いろいろ知恵と工夫を働かす。結果J1復帰という最大の成果をあげてもらったという意味ではラッキーな面も多々ありましたけれども、重要なシーズンだったと思っています。冒頭申し上げましたようにチームのがんばりプラスみなさんの後押しがうまく具合に化学変化を起こして、当面の最大の目標をクリアすることができたということです。それで去年から今年にかけてどういう予算でどういうチームを作ろうかと。10月くらいから昇格に絡んできてたわけですから、まずは監督をどうしよう。私と強化部長の間ではJ1復帰を果たせたら当たり前のこと、結果果たせなくてもクラブの方向性の中できちっと。昨シーズンはチームの進化という部分でも十分な成果を残しているということで、今年の石崎監督の起用、それに向けての監督へのオファー。これも私と強化部長の間では、考え方は一致しておりました。J1復帰で継続するのは当たり前と一般的には考えられるんですが、実は10月くらいの時点で成績如何に問わず、ほぼ石崎さんの続投は決めていた。ただ監督とは契約関係。基本的には1年。複数年契約をする場合もあるんですが、去年までは1年契約で、オファーしても監督のほうから断られるというケースも当然あるんですが、クラブのはっきりした成長を監督も一定の評価を与えつつ、4年目の今シーズンにつながったということでございます。

司会：社長、ちょっとすみません。申し訳ございません。スマートフォンで音声継中されている方がいらっしやいましたらご遠慮ください。議事録をネット上にアップされる方は結構でございますが、生の音声等を継中でウェブ上に公開するのはご遠慮ください。著作権はサポーターズ集会で有しておりますので、お願いいたします。恐れ入ります。

矢萩：私自身がそういうのを使わないもんですから。すみません、かなり裏話的な話も含めて立ち入って話してます。できるだけ情報としてきちっとお伝えしたいと思いますので。そういうことで去年クラブとしては最高の結果を残すことができ、今年にいかにつなげていくかということでございます。石崎監督を呼んだときから、もちろんJ1復帰というのが当面の最大目標であるので、それを目指して毎年どういうチームを作り、どういうトレーニングをして、1年の間でどういう形でチームを成長していくかかなりお話ししながら3年間やってきたわけですが、J1に上がっても長く居続けることができるチーム作りを相当意識してトレーニングしていただいたというふうに思ってます。ただし育ててきたチームが簡単に移籍しちゃうので、その辺がうまくいかないなという愚痴も聞いてはいるんですが、基本的には上がってもキチンとできるチーム作りと。そういったことをやった上での4年目のJ1。私としては去年から今年にかけての最大のポイントは、その3年間の積み重ねをうまく継続できる形を今作ってるシーズンである。もうひとつは、それでもJ1で戦うためには去年の戦力のままでいいということにはなりませんので、得点力の部分を中心に解消していかなくてはいけない。課題はたくさんありましたから、特に前目の選手の中で昨シーズンより可能性が広がるような選手の補強ということで、ご承知の通り新加入選手が決まってきた。更にキリノの復帰にもつながったということです。それから、もうひとつ大きな特徴は、クラブとして最大の5人というユースからの昇格。去年私もU-18、15も含めて試合はなるべくたくさん見るようにしたんですけども、行く先々で育成力については他クラブの指導者、社長のみなさんからも、コンサドーレはうらやましい、どんどんユースから有力な選手が上がってきて更にその下の年齢にもまだまだたくさんいて、なかなかうまくいってるねと評価をいただいています。今年3年生になる2年生の中にも、1年生の中にも、世代代表経験がある選手が5、6人くらい在

籍していますので、主要テーマであった育成型クラブ作りについては少しずつではありますが成果を残せてきてるのかなと。チームについては石崎監督3年の蓄積を背景にした継続、J1で戦うための特に前目の選手を中心にした重点補強、更に中長期的に将来的に中心を担う若手育成という部分をうまく今シーズンにつなげることができたのかなと思っております。そうした中で、ポジション争いが活性化していきますので、トータルとしてはおのずとレベルが上がっていくというふうに考えております。今年の強化費は株主総会前ということもあって正確な数字は申し上げられないのですが5億前後。去年が3億8千万の予算ですから、1億ちょっとしかあげてないという中でのJ1での挑戦ということになります。今年4回目、最初はJリーグ参入だったんですが、トップリーグ参入時に用意した強化費の中で圧倒的に一番低い数字。去年も経営的に楽なシーズンじゃありませんでしたので、J1といえどもきちっと収支バランスを取らなきゃならない。当然強化部長も理解を示した上で、お話ししたチーム編成になっております。ただしこのチームで十分J1の中で戦っていけると、監督コーチ強化部長私も同じように考えておりますので、なんとか結果を残していきたいと思っております。クラブとしての次の目標は、当然のことながら強化の5段階計画は残した上で、J1に上がったあとはそこで安定した成績を収める。定着した上で更に上を目指していく。そして近い将来トップ3を更に目指せるチームを作るという計画に沿ってますので、今年はコンサドーレにとって壁とも言えるスタート年となる非常に重要な1年と考えてます。その重要なシーズンをそんなには多くない強化費。なかなか優れた強化部長で、お金が少ないことをうまく利用するという言い方はおかしいのですが、例えば交渉の一端を。細かい交渉経過は常に私と強化部長の中で共有するようにしてるのですが、ある選手に、うちは1億しか出せないけどもきてもらえるだろうかと。そうすると駆け引きは必ずどこの世界にもあって、1億2千万なら譲ってもいいよと。強化部長は、うちは1億しか出せないと最初から正直言ってるので、1億2千万だったら次の選手を探します。というような交渉を積み重ねてほしい選手を引き寄せる。技術としては相当優れたものがあると思いますので、そういう意味では6億円7億円分くらいの選手は十分集めることができて。4年間過去つきあってきて、私としては5億という数字についてはあまり心配しておりません。それよりも問題は私を始めフロントスタッフがチームにどういう形で後方支援できるか、また一緒になって戦えるかということ。ひとつのポイントとしてはお客さんをいかに増やすかということに尽きるのかなと思ってます。昨年はお陰様で夏場から秋、最終戦にかけて。厚別の試合が中心ではあったんですが、お客さんの数が年々減ってきたという現状の中で、チーム成績が上昇してきたこともあるんですが、最近の中では相当多くのお客様に厚別に来ていただくところまであげてすることができました。例えば厚別の秋から最終戦の手前までは8000人から11000人くらい毎試合集まっていた。2010年シーズンは厚別の平均が6400人くらい。平均数字を1,500厚別で上げ、その積み重ねが最終戦の39,243人というクラブ史上2番目のお客さんの数につながったと思っています。平均入場者数で計算しますとドームが倍。例えばドームが14,000人くらいで厚別が7,000人くらい。おとしは厚別の比率が半分より下回って6,000人台まで落ちている。少ない試合では4,000人くらいの時もあった。コンサドーレが始まった特別な場所という思いはありますので、いろんな形で厚別対策というのやってきました。ドームはコスト面もあってなかなか派手な展開はできないんですが、厚別の場合には例えば年齢別にシニア向け、女性向け、学生向け、いろんな企画をやりながら少しでも新しいお客さんを開拓しようと、2、3年前から積み重ね。それから厚別周辺対策。前はみなさんと一緒にポスティングもやっていたんですが、去年は厚別周辺にのみ折込ちらしをいれるというようなことをやったり、地区のまちづくりセンターという町内会をまとめる組織がありまして、まちづくりセンターとか区と協力しながら。バスが発着する新札幌駅界限、大谷地駅辺りも含めて限られた予算の中で積み重ねてきた成果とチーム成績が連動して数字を押し上げることができた。きっと今年のJ1の中では鳥栖と一番下を予算ベースでは争う形になると思うんですが、その中でも特に最終戦のような雰囲気を作ることができれば必ずチーム成績につながっていくと。我々もいろいろな形でお客様を集めるための努力はしていきますけれども、是非ここにおられる皆様中心に去年以上の熱狂を各スタジアムで表現できるようにご協力いただければと思っております。結

果としては去年の入場者数は21万人目標に対して、19万9千人に終わりました。最終戦3万9千人集まったのに関わらず19万9千人。計画比、1万1千人くらい下回ったということです。一昨年に比べると1試合試合数が増えたシーズンでもあり6千人ほどトータルは増えてはいるんですが、1試合あたりということでしょうと若干減っている。言えは言うほどいいわけに聞こえる部分もあるんですが、震災の影響もあって他のクラブも軒並みお客さんの数を減らしてます。スポーツ紙なんかにも一部でてますけれどこれは震災の影響だけではなくJリーグトータルとしてもいろんな努力をしながらやってきながらも、どちらかというとやっぱり景気の低迷と。ほとんどのクラブ、特に資金的にも動員的にも上位であったクラブが軒並み10%以上、多いところでは30%以上前年比で減らしているというシーズンでもございました。1位がレッズ2位が新潟という構造は変わらないんですが、その浦和も相当大きく数字を減らしてきている。別に他が減ってるからコンサドーレよくやったということで紹介するわけではないのですが85%、前年比で10万人減。同じくJ2で戦ったFC東京は78%、9万3千人減らしているということで、有力クラブが軒並み大幅に減らしている。皆さんも去年感じられたと思いますが、うちにとってもホーム開幕戦を流してしまったということですか3試合延期になったんですけれども、そのあとが全て水曜日のナイターになった。それから途中までドームか厚別か未定で発表していた試合のうち、確実にドームでできる予定が結果として1試合減った。そういった状況の中で厚別から最終戦にかけての人の動きについては十分手ごたえを感じることができるシーズンだったと思っていますので、そういう勢いをいかに今シーズンの特に前半につなげていけるかというのがクラブとしては最大の課題だと考えております。今年の目標は26万人を今のところ設定。前回J1だったときの2008年と全く同じでリーグ戦が17試合、ナビスコカップが3試合で、26万8千人という数字を残してますから低すぎると感じられる方もいらっしゃるかもしれません。単純にお客さまが何人入るかということは重要なんですが、今年はそれ以上に興行収入、入場料収入を確実に予算達成できるかというところにクラブとして置いていきたい。2008年は興行収入が5億2千万。今年は26万人の目標で4億7500万という下方修正した予算を立ててます。弱気と感ずるかたもいらっしゃると思うんですが、今まで毎年決算で興行収入の狂いが相当大きく、それが結果として毎年赤字につながっている。いたずらに人数のほうだけを上げていくというよりはキチンと分析した上、今年は4億7500万の興行収入を確保するために年間を通してなにをやっていくかと。昨年11月からマーケティング企画部を新設。チケット関係を一元的に専任で行う部を新たに作ったということです。チケット業務だけではなく年間計画を立てて途中でキチンと分析、足りない部分があればそのあとどう生かしていくかと。今までは全社でコントロールしていて責任の所在がはっきりしなかった。全体でやるということで中間把握ですとか結果責任にややあいまいなところがあったという反省を踏まえて、マーケティング企画部というチケット系、入場者数をきちんと一元的に管理して、全社に指令をだせるような役割としての部を新設したということです。部を新設するだけで全てうまくいくとは思っておりませんので、この部を中心に私も関わりながら年間入場者数、興行収入のコントロールを今まで以上にキチンと目配りをしていきたいと思っております。それからJ1のときは毎回、これはうちだけではなくナビスコカップの入場数。平日開催が多いということもあってお客さんをたくさん集めることが難しい。初めての試みとして指定席をやめてメインスタンド自由席・バックスタンド自由席のみ2つのカテゴリーに分けて、しかも料金もリーグ戦に比べると2000円以上安く作って、今までとは違う形にしました。それだけではなくて毎週1回ほぼユースチームの監督コーチ、強化部が集まる育成ミーティングでも今後最大の課題はお客さんをいかに集めるかということに集約されると。そのためにはユースの指導者自身、その先にいるファミリーにチケットを売っていただくご協力のお願いもしながらクラブ全体で改めてチャレンジしていきたいと思っております。成績がいいからお客さんが入る、尻すぼみになったら入らないということが続けていくようであれば今までと同じように結果としてなかなか前向きのクラブ、チーム作りをできない。HFCトータルとしてまずはお客さん。入場者数のところに最大の重点を置いて、年間を通して強化していきたいと考えております。だいぶ時間がかかっちゃいましたけどよろしいでしょうか。まだ話さなくちゃいけないことが結構ありますので、すみません。話がくどくなっちゃってる部分

もありますので、あっさり話すようにします。あとでいろいろご質問いただきたいと思いますのですが、何点かポイントになることについて簡単にお話します。そのひとつ、クラブライセンス制度。これは3年くらい前からJリーグの中で世界基準にあったリーグ作り、クラブ作り。アジアサッカー連盟（AFC）が真っ先にクラブライセンス制度というのを導入しましたので、それに合わせてJリーグも体制を急ぐべきだという議論があり、相当時間をかけてこの1、2年はやってきました。結果として今シーズンからスタートいたします。これは相当分厚い資料で全部読んでと途中で頭が痛くなるくらいの量なんです、骨子としてはライセンスを各クラブが取得するにあたって競技面・施設面・人事体制組織運営面・法務面・財務面。この中にクラブとしてクリアしなくてはいけない項目がありクリアしなければ翌シーズンのライセンスを発行しないと、わかりやすく言えばそういう制度です。毎年6月末までに資料を提出、9月末までに審査をして11月末までに翌シーズンのライセンスを発行するかどうかを決定する。これを毎年行う。競技面というのはアカデミー組織・医療体制・選手契約に関わる問題。施設面はスタジアム基準。人事体制運営組織面は財務担当をおこななければいけない、運営担当をおこななければいけない、広報担当をおこななければいけない、ドクターをおこななければいけないというような組織的な問題。法務面はコンプライアンス。就業規則がどうなっているかと、そういった問題ですね。それから財務面。これはうちのクラブにとっては非常に重要なクリアしなくちゃならない項目なんです、3年連続赤字決算のクラブにはライセンスをおろさない。債務超過クラブには翌年のライセンスをおろさないということです。これがスタートしていたら、ちょっと変な話ですけども今回J1に復帰できたかどうかは結構微妙になってたというくらいうちにとっては非常に厳しいハードルというか。でもある意味当たり前にコントロールしなくてはいけないと思うのですが、今年からスタートということですから2014年まで。今シーズンを含めて3シーズンの中で解消していこうという猶予期間が設定されてます。ですから今年がどうなったから、いきなり来年J2ですらやれないとかそういうことはないんですが、ライセンス制度がスタートするうんぬんとは別に3年連続赤字とか債務超過とか、クラブ経営的には非常にまずい事態。それをいかにクリアしていくかは毎年毎年頭を悩ましながらやってることですので、今年も含めて3年間でクリアする体制にもっていかなくてはならない。今まではどちらかといいますとJ1に昇格する時に審査された上で決まる。これからはJ1にずっといるクラブでもJ2にずっといるクラブでも昇格関係なしにクリアしなければ存続すら危うくなるという制度が今年からスタートするということでございます。今までクラブとして、してこなきゃいけない部分が明文化された。今まで以上に財務面に対するコントロール、目配りをしていかなければならないと気を引き締めているということでございます。それからもうひとつ大きいのがスタジアム面。コンサドーレはホームスタジアムを札幌ドームと厚別と2箇所設定してます。今のところドームは100%スタジアム基準をクリアできてるんですけども、厚別がグレイな部分がありまして。入場可能観客数について今までもJリーグ規定の中にあり、J1は1万5千人以上、J2は1万人以上、芝生席はその中には認められない。これからはこの数だけではなく照明、ピッチ、メディア施設、トイレ数とか相当細かい規定があります。クリアできればライセンスをおろさないというところにつながるんですが、Jリーグクラブは公共施設をお借りして運営しているところがほとんど。しかももともと陸上競技場だったところをサッカー場としても使っているという状況があり、こういう基準を設けることによって、例えば札幌でいいますと、厚別の持ち主である札幌市側と、Jリーグ基準がこういう形でかなり厳しくなったので、時間がかかってもいいからクリアできるようにお願いしますというお話をこれから息長く札幌市側としていかなきゃならない新たな課題がでてきたということです。ここの中に札幌市の職員の方もいらっしゃるかもしれませんが、例えばJ1クラブのスタジアムとして厚別を見た場合、今やビジョンがないスタジアムはJ2でもほとんどない状態。クラブライセンス制度がでたからということだけではなく、日本で5番目の都市のサッカースタジアムとして少しでもいい形にしていきたいということは今までも言ってきましたが、改めてと思っております。みなさんもお気づきだと思うのですが、今シーズン室蘭と函館を設定できなかったというお話につながっていきます。コンサドーレは活動地域をオール北海道で登録してるクラブでもあり、函館・室蘭の思い入れもすごく強く、地元も非常に協力し

ていただきながら開催いただいた会場。片方でも残せるかどうか最後まで考えていたんですが、J1に昇格した場合まず1万5千人という数字についてはいずれも大幅に届かない。それからもろもろの設備も基準をはるかに下回る。今年はナビスコカップが水曜日、初戦だけは3月20日火曜日の祝日ですけれどもそれ以外は2試合全て水曜日。であればナイターしかないということで函館・室蘭はできない。3月はまだ安定してできるかどうかわからないと、もろもろの事情があって今年はやむなく室蘭・函館については開催できなくなりました。クラブ目標でありますJ1で定着してということを前提に考えますと、今後ますます函館室蘭の開催については難しくなるのかなと思っています。ただ、まだまだライセンスはスタートしたばかりですからいろんな機会でなんとか。今までも基準を緩和しながら認めてもらってた経緯もありますので、引き続き函館・室蘭開催の可能性について探っていきたいと思います。とりあえず今年はそういう事情で札幌開催のみになったということでご理解をいただきたいと思います。函館室蘭について、特に室蘭は2年前から西胆振地区・伊達・登別各地にご協力いただきながらスタジアム周辺で西胆振地区のグルメ展開を相当力を入れてやっていただいて、それが室蘭のお客増に結びついてるという流れもありますので、函館も含めてできましたら室蘭西胆振地区のアピールができる場をドームもしくは厚別で。今までのつながりの歴史を継続していきたいというお話をすでに室蘭・函館のほうと始めていることをご報告しておきたいと思います。強化部長がきましたので、私からはあと何点か。去年から行いましたCスマイルプロジェクト。それまでもここ3、4年、選手を札幌以外の地域に積極的に送り込んで地元の人達と交流するいろんなイベント企画を行ってきたんですが、去年は更にウィークデーの午前練習のみの午後を利用して、札幌市内で25の小中学校、約4500人にあたるところに訪れ、まずチームをもう少し市民の側に認知してもらえるように、それからキッチンとそういった方々とコミュニケーションを更に密にできるようにと。クラブイベントの場合言われたから仕方はないわというような場合もあるのかもしれませんが、選手は全員積極的に参加していただいて非常に好評でございます。ミニサッカーをやったり質問コーナーを設けたり、最後は全員と握手して写真を撮って、1時間くらいの企画なんですが、選手を身近に見た子供達からすれば是非次は試合で見たいというふうに当然考えるわけでございますので、そうしたことの積み重ねを今年は更に積極的に展開したいと。それから札幌市以外でやってきたことも継続していきたい。2年前から始めた宮の沢のハーフタイムパーティもみなさんからご好評をいただいています。クラブ事情もありますので有料イベントにはなっているんですが、宮の沢というJリーグの中でも有数の練習環境。ボールも地面に転がってますので、サッカーに直接触れ合っていたいただきながら選手をもっと近いピッチ上で触れ合っていたいただきたいということで始めたイベントで、これも今年かなり日程は詰まっているんですが、どこかで必ず実施したいと思っています。それからもう一つ、去年の11月、12月ぐらいから、主要スポンサーの皆さんとはJ1に復帰するという事を念頭に置いたスポンサー料の増額交渉をずっとやってきました。スポンサーの皆さんに笑われる事は一切ありませんでした。3位以内、落ちても4位ぐらいでございましたから好意的に対応して頂いて、J1に上がった場合には広告価値、露出量もろもろ上がるだろうという事で、現在のところ石屋製菓さんの大幅増額をはじめ主要スポンサーの皆さん殆どが増額に対応して頂いておりますのでご報告したいと思います。それから今日の段階ではまだ正式に発表できないんですが、去年1年間クラブ史上初めてスポンサー枠で空けておりました左袖の枠については、来週ぐらいに新しいスポンサーを発表出来るのかなと思っています。(会場拍手) 先程もちょっと触れましたけれども、ユースから5人が昇格する事によって道産子が11人のチームになってます。34人体制でスタートしてますので、ほぼ三分の一を占める。これは過去のチーム編成の中でも最大の割合かなと。2008年のJ1シーズンも8人くらいいましたのでそれなりに多かったんですが、非常に大きな特徴だと考えております。育成についてはこれからも力を入れながら、来年以降もどんどんユースチームから引き上げる方向でいきたいと思っています。今まで以上にコンサドーレは北海道の特徴的なクラブであると、道産子が11人いるという事をいろんな機会に全面に出していきたいと思っています。今まではどちらかというと札幌圏を中心に出身地が偏ってたんですが、今年は北見の方から奈良君が、十勝の清水から榊君が入ったり、どんどんエリアも広がってきている。道産子が多くて、それが中心になると

いうイメージをしっかり全面に出して行きたい。私もいろんな所でお話をさせて頂く機会があるんですが、いつもそういった機会に、冒頭「コンサドーレのチーム名の由来をご存じの方？」っていう質問を必ずする。まさかこの中で知らない人はいないと思うんですけども、実は大学3、40人いる大学生の中で手を挙げたのは1人。分かるっていう事で手を挙げた人が1人。それから30、40、50代ぐらいの人が半分以上いるような会合でも、2、3割しか手を挙げない場面がしばしばあります。クラブも今年16周年、17年目のシーズン。我々が当たり前だと思ってた部分がまだまだオール北海道に由来もそれからコンサドーレの今後の在り方も含めて十分伝わっていない。道産子11人になったっていう事と合わせて、コンサドーレは道産子を意味する北海道のチームであるという事をますますアピールして行きたいと思っています。まだまだお話しなきゃいけない事もたくさんあると思うんですが、1時間くらい経ちましたので、取りあえずこの後は強化部長のお話に引き継ぎたいと思います。最後に昨年、J1昇格にあたってJリーグといろんなやり取りがありました。前回2007年から8年にかけてもそうだったんですが、J1への昇格要件で非常に重要な項目、債務超過を如何に解消するかというやり取りが去年8月、9月からJリーグの中であり。正式には株主総会で決める話ですからそれ以後発表する事になろうかと思っていますけれども、Jリーグに対して2012年中に、昨年度の決算が確定した時点で増資を中心に債務超過の解消を図るという説明をし、今年のJ1昇格を認めてもらったという経緯があります。債務超過が発生した事自体、それから1年で債務超過を解消できなかった事自体については社長である私の責任という事でございますけれども、昨年そういうやり取りを経た上で今年J1から新たなスタートという事でございますので、そういう方向にあるという事だけを最後にご報告したいと思います。正式には3月23日の株主総会後に発表させて頂きたい。という事で最後、やや暗い話もありましたけれども、基本的には新しい力の参入も含めて今シーズンは過去J1もしくはJカテゴリーで戦った時に比べても前向きになれるシーズンだと。最大のバックボーンはやはり最終戦の3万9千人とも思ってます。是非今シーズンも皆様の後押しで、予算は少ないチームではありますが、皆さんの力でJ1で頑張りたいと思いますので、引き続きご支援を宜しくお願いします。有難うございました。後程ご質問を頂きます。宜しくお願いします。

司会：有難うございます。社長に関してのご質問の時間は後で取らせて頂きます。運営側からお願いがございます。会場内でビデオカメラ、ボイスレコーダー、それから先程も申し上げましたがスマートフォンでの映像、音声の中継をされていると思われる方が何名かいらっしゃいますのでご遠慮頂きたいと思います。北海道フットボールクラブさんがこの場でお話頂く内容は、本来株主総会を経てから頂かなきゃいけないようなオフレコの部分も多数含まれております。今までのサポーターズ集会との信頼関係の中でお話頂いておりますので、それをダイレクトにネット上その他に公表される事は、主催者側として望み形ではございませんのでご遠慮頂きたいと。ただ、報道関係の方々は報道パスを発行してこの会場内に入って頂いてます。報道関係の方々に限っては撮影、音声、その他すべて自由に承諾しておりますので、その辺をご理解頂きたいと、そのように思います。それでは5分間休憩で、15分から三上強化部長の話を頂戴致します。宜しくお願い致します。

－休憩－

司会：それでは始めたいと思いますが、扉、一旦閉めて下さい。先程もご注意申し上げましたが、毎年ネット上に中継のように文章が出回るのはもうこれ致し方がない。2チャンなんかにも、今もう袖のスポンサーの話がボンとすぐ、1分前の情報が掲示される。関東サポですとかいろいろこのサポーターズ集会の動向を注視していますので、文章でネット上アップされるのは好ましいとは思いますが致し方がないかなと思っています。が、本当の映像と音声、ダイレクトでアップされてる方がいらっしゃる。ネット上で、こちらもモニタリングしていますので、それは辞めて下さい。各々のプライベートな部分の顔とかも出回りますので、その音声

と実際の映像のダイレクトなネット上でのアップは辞めて頂きたいと思います。これから三上部長がお話になる内容も結構コアな内容で、オフレコの部分が多いので、その辺はご了解頂くと。良識あるサポーターのコンプライアンスに期待致します。それでは三上部長、お願い致します。

三上強化部長(以下三上)：皆さん、こんにちは。今年もこのようなお時間頂き有難うございます。まず始めに、すいません。12時開会の時に別のミーティングがありまして、ちょっと遅れて来ささせてもらって申し訳ありませんでした。昨年、皆さんの熱い声援で、お陰様でクラブ、チーム、そして皆さん方が一体となって戦えたシーズンだと思っています。チームスタッフ、選手、チーム方の人間として改めてお礼させて頂ければと思っています。有難うございました。本年度のチーム体制、強化コンセプトのお話をという事で依頼を受けておりますので4点程。まず1番目にチーム編成の考え方、2番目に今シーズンのチーム目標、3点目に先日までやっていたグアムキャンプの状況、4点目に簡単ですけども熊本キャンプ以降のチームスケジュール、考え方。出来ればここ多めに最後に皆さん方のご意見、質問を頂ければと思っておりますので、宜しくお願い致します。まずチーム編成の考え方。先程社長からもありました通り昨年で15周年。その中で、昇格という事ではないんですけども、日本国内の最上級リーグに4度目と。逆に言うと3度の降格を経験しているクラブとしまして、そのうち私自身が経験している部分で言うと岡田監督時代の昇格降格、三浦監督時代の昇格降格、そして今回の昇格。今の強化部長という立場になってからは三浦監督の時の昇格、翌年の降格、非常に自分の力のなさを感じ、当時おりました。クラブの、私自身の歴史、そう考えた中で今年のチーム編成をベースに置かせて頂いております。具体的にはまず5段階計画に沿って、今回ステップ5であるJ1で安定した戦いをする。それを目標に第一歩目のチーム編成をさせて頂きました。この5段階計画、今年度J1で安定して戦いのできるチーム作りの1年目と置いております。一番大きな武器は継続だという事を当初から思っていました、昨シーズンまでチーム編成にあたっておりました。先程申し上げた過去の昇格降格。残念ながらこれはもういた仕方ない事なんです、クラブの歴史も浅い事もあり、当時継続というよりは何とかJ1に残留したいという目標を考えながら、チーム編成せざるを得なかったと。ただ、それらの昇格、降格を経験した中で、大きく外国人選手に依存したチーム作りでは難しい。また、日本人選手も期限付きに依存するチームではやはり難しいという事が、僕自身一番大きく感じた。言葉を変えれば外国人に大きく依存しないチームであり、自前で育てた選手がベースになるチームを作って行かなければ、コンサドーレ札幌としてJ1で安定した戦いをして行く事は難しいのではないかと感じております。これを具体的編成に当てはめた場合、昨年まで在籍していた多くの選手を引き続きチームに残ってもらう事が、まず一番だと考えておりました。この世界ですから残念ながら外国人数名、西村、そういった選手とは契約を更新できないという苦渋の決断をせざるを得なかったんですが、その他の多くの日本人選手とは契約更新する事が、まずは大きなチーム編成のウエイトになるという事で、昇格以来チーム編成のひとつの柱として考えておりました。お陰様で何とかそういう事が出来た上で、いろいろな選手と昨シーズンでの戦い方、今シーズン向けのチームの作り方をいろいろ話しながら、最終的に更にJ1で安定した戦いをする上でこのチームにまだ足りない物、それらを補う為の補強をしようと、強化部として3つの基準を考えました。まずは経験です。J1で戦った事のある経験、安定した戦いをしてきたチームの経験。もっと言うのであればJ1でチャンピオンというようなクラブチームのメゾット、精神を受け継いでいる選手。これはすごく大切なんではないかと。3シーズン石崎監督が取り組んできたシュートを打つ攻撃とボールを奪う守備。一言で言うと攻守の戦術。これをこのJ1という舞台でもう少し足りないのは、ボールを動かす力だという風に思っていますので、2点目はボールを動かす技術を有している選手。3つ目、昨シーズン本当に一体感持って戦う事が出来ました。今シーズンの武器は継続とこの一体感だと思っています。更に一体感を向上させる為にも、チームにプラスになる上で必要になるメンタルの向上。この3つの基準をベースにチーム編成をしようという事で決めました。幸いこういう選手に来て頂きたいなという殆どの選手に来て頂く事が出来ました。その殆どの選手はうち以外のクラブからもオファーを頂いている中で、最終的にうちを選んで頂いたとい

う訳なんです、そういった内情を知っているメディアの方には素晴らしい交渉力ですね等言われる事もあるんですが、そういうお言葉を頂く事自体有難い事なんですけども、実は僕の力では全然なく、多くの選手が必ず言ってくれるのは「熱いサポーターの中でサッカーをやりたい」と。そういう事でうちのチーム、ユニフォームを着る決意をしてくれているというのが実情です。誠意とかいろいろ言われる事もあるんですけども、最終的にはここに居る皆さんを中心とするコンサドーレ、北海道フットボールクラブを支えてくれる皆さんの力が大きな要因となってる事、改めてオフ期間も感じさせて頂きました。途中で昨年ディフェンスの中心と頑張ってくれた山下選手がセレッソ大阪に完全移籍で、復帰する事になったんですが、正直僕自身も想定外でした。うちに来て頂く時、昨シーズンの契約交渉の中でも何時かはセレッソからオファーをもらえるような選手にならないとダメだよという事は、僕自身ずっと彼本人に言ってました。けれどもまさかこのタイミングでとは正直思ってませんで、本人にとってもすごくびっくりした事でもありました。こういう時期にチームを離れるという事で、彼の事を良く思わないというようなお声もたまにお聞きするんですけども、彼自身も非常に悩み、コンサドーレの事を一番に考えてくれてました。彼の弁護する訳じゃないんですけども、僕が知っている限りうちがしている以上、他の2チームからオファーがありました。それでも彼はコンサドーレ札幌で来年やる事以外考えられませんかという事を話してくれました。ただやはり他チームは彼を尊重した上でプロとしての評価である契約内容、例えば年数とか金額とか、更に大幅に出来る範囲で再提示されてきた。選手ですからプロとして考える一方、気持ちとして赤黒のユニフォームを着てやりたい。そういった葛藤の中で最終的にプロとしての道を歩んで行ったと思っています。この移籍によって編成に大きな修正を加えないといけないという事では非常に痛手ではあったんですけども、彼がそういう決断をした事は、彼自身にも話しましたがとても非常に良かった事だと思っています。この移籍が後々皆に認められるかどうかは、今シーズン以降のセレッソさんでの活躍によるという事は彼にも話しましたし、僕自身もそう思っております。ちょっと話がずれましたけども、継続を武器にしながら更に3つの基準。経験、ボールを動かす技術、そしてチームに更なる一体感、向上させるであろうメンタルを有している選手という形で、新たに5名の日本人選手、外国人選手2名、オファーをさせてもらったと。皆さんの熱い声援なんかが大きな理由になり、こんなにスムーズに行っているのかというぐらい、新しい選手はオファーを受けてくれた。内村がシュートを打てば入りますみたいなコメントをしてましたけども、皆さんのお陰でオファーすれば契約が出来たというような感じでございました。その他、2シーズン過去やっていたキリノ選手を韓国のKリーグから復帰させるという事で考えまして、彼は貴重な戦力だと思っています。発表が少し遅れた理由ですけども、彼のところには3カ国からオファーがありました。私共としましてはクラブ選手とも、お互いに良いオファーであればテーブルに乗せると。その中で一番良い方法を考えて行きましょうというスタンスですずっとやっておりまして、キリノの今回のオファーもきちんとテーブルに乗せて話をさせてもらいました。そのうちの1カ国は非常に魅力的なオファーに成り得る可能性があったという事もあり、発表が延び延びになってしまった。本人には非常に大きなオファーで、クラブにとってはあまり旨味のないと言ったらおかしいですけども、そんなにメリットがないという事が最終的な提示でした。両方メリットがある形が一番良いと考えてますんで、キリノの復帰を決めました。選手は自分に対するオファーが非常に良ければ、クラブがそうは言っても行きたいと、一般的にサッカー界では多い。けれど赤黒のユニフォームを着たい、お金に換算できない部分も考えてくれて。この状況じゃ移籍はクラブとして判断できないよという話をした所、一言の文句を言う事もなく「いや自分自身札幌に戻りたいのが一番だった」と。金銭的な事はJ1で活躍し、更なる良いオファーをもらえるように頑張るだけなんで問題ないと。その3カ国、旧正月があつたり何だかんだありまして、大体どこなんだとか想像が付くかもしれませんが、交渉したくても国自体が動いてないという中で最終的にあの時期に発表になったと。決してキリノが駄々こねていた訳でもありませんし、クラブとしても戦力として考えてないから何とか売ろうと、ぎりぎりまでオファーないか待とうという事で、遅くなった訳じゃありません。その他に若手育成という事でアカデミーから5人。それぞれU-18世代代表に召集もされる経験を持ってる大きな新しい力を加え、トータル34名でチームをスタートさせ

ようという事を考えております。次にチームの目標。これは昨シーズンも皆様方に伝えさせて頂いたんですけども、今年も選手に僕が契約交渉の時に話したそのままをお話出来ればと思ってます。まず、J 1 で定着です。それを達成する為に、勝ち点 4 2 を最低目標として設定させてもらい選手に話してます。これを考えた場合いろいろなデータ等ある訳で、すべてがデータではないんですが例えば昨シーズン。J 1 昇格を考えた場合には、勝ち点は 7 2 以上必要であったし、その為にはホームゲームで 7 割 5 分以上の勝ち点 3 を稼がなければ、現実的に 7 2 以上の勝ち点に繋がらない。この場で昨年初めてお話させてもらいましたが、クラブとして初めて勝利給のウエイトを変えさせてもらった。それがすべてではないんですが、一番の要因は皆さんの声援であり、次に 1 週間のトレーニング中、試合前、すべてにおいて今週はホーム、絶対負けられないと常にミーティングで。お陰様で昨年はホームゲームで数多くの勝ち点 3 を取る事が出来、結果 J 1 昇格という形になったようにですね、今シーズンの勝ち点 4 2 をデータでひとつ紐解いてみます。簡単に言うと 9 勝 9 分何 1 0 敗という所に如何に早く持っていくかがポイントになると思っております。これは、勝ち点でいうとまだ 3 6 です。最低目標勝ち点 4 2 に対してあと 6 ポイント、そこから上積みさせなければいけない。ここに到達した時、残りが 3 試合なのか、5 試合なのか、1 0 試合なのか。当然残りゲーム数が多い中でこの 9 勝 9 分何 1 0 敗に持つて行く事の方が、より勝ち点 4 2 以上、定着から中位、その上を目指して行けると。では具体的にどうなのかという所でお話ししますと、はっきり言ってホームで勝つ事です。9 勝のうち極端な話 7 勝はホームで上げる。そのぐらいのホームでの勝ち点 3 に拘わらなければいけない。もうひとつは 9 分。アウェイでの引き分けをどれだけ積み重ねられるかが大きなポイントになってるという事が、過去の歴史で分かっております。過去に 9 勝 9 分に到達しながら J 2 に降格してしまったのが数チーム、少ないんですけども内訳を見た場合、9 勝のうち 4 勝ぐらいがホームだったとか、9 分けはホームばかり、9 分けのうちの 7 分けはホームばかりだった。そういうチームは最終的には勝ち点 4 2 に届かない。結果降格してしまうと。逆に 9 勝 9 分けに行きながら J 1 に定着したチームはどうだったか。9 勝のうちの 7 勝はホームで上げる、9 分はアウェイで如何に積み重ねられるかという形になっております。選手には引き続きホームで勝つという事と、アウェイも当然勝ちにいくと。ただ勝ちに行きながらどういう展開であろうとも、最後の最後はみんなで歯を食いしばってでも勝ち点 1 を持ち帰るよと。これを如何に継続できるかが勝ち点 4 2、そして J 1 定着という目標に繋がるという話をさせてもらって、各選手からその目標に向かって、自分の力を 1 0 0 パーセント出せるよう準備したいという事で、全選手と契約を締結させて頂いております。グアムキャンプでも、チームミーティングで改めて勝ち点最低目標 4 2 を全選手、全スタッフに伝えました。グアムキャンプは 3 つの柱を考えてました。フィジカルの向上とディフェンスの構築、そして最後はコミュニケーション力の向上。自分がどういう選手であれ、周りの選手がどうなのか。オンザピッチ、オフザピッチの中でコミュニケーション取ってやって行こうと。フィジカルは鬼のような古邊が中心になって非常に厳しくやりました。他チームさんとの比較で言っても、僕らと同じ時期に多くの K リーグチームとか大宮さんなんかもだったんですけども、うちの選手が可哀想になるくらい走らせてまして。ただ走らされてるだけじゃなく、オフも殆どないみたいな。他チームはうちより後に来て、2、3 日したら丸一日オフとか。というようなのを横目にしながら一年間戦えるフィジカルの向上を徹底してやって来ておりまして、特に新入団選手はこんなに厳しいキャンプは初めてだと、皆が口を揃えて言うぐらいのフィジカルのトレーニングを中心にやって参りました。その成果は今後出して行かなければいけないと思っております。また数値的な物も全て古邊が管理しています。昨年よりもチームとしてのベースの数値は上がっていると。古邊が少し驚いていたのはアカデミーから出てきた 5 人。それぞれのフィジカル数値はプロでもかなり高いレベルに到達している、鍛え甲斐があるなど言っていました。まだ鍛えるかい！と僕は思っていたんですけど、それぐらいやってもらわなければいけないので良い事かなと思っております。次にコミュニケーション。当時まだキャプテン、副キャプテン、発表してませんでしたけども、それぞれがそれぞれの立場でもっとこういうトレーニングをした方が良いんじゃないか、この中でもっとここを強調した方が良いんじゃないのかと。比較的早くチームに馴染んだと思ってます。新入団選手で言うと、実際そうじゃないんですけども表向きシャ

イと言いますか口下手と言いますか。例えば前俊、一誠。彼らの方が逆にうるさいぐらいしゃべってまして、食事会場も各部屋も、当然ピッチの中でも本当に良い雰囲気が出来ました。最後にディフェンスの構築。監督の石崎の考え方としては、まず守備がベースだと。守備がしっかりしてないチームはリーグ戦という長調場では良い結果を出せないということを、第一に考えている指導者のひとりです。そういったことから、新しく入ったノース中心にコンサドーレが今までやっていた守備、そして今シーズン更に向上させようと思っている守備について事細かく話をしていまして、その他の最終ラインの選手含めてディフェンスの構築に時間を掛けてやってきました。午前中、古邊のフィジカル、午後からは監督石崎のボールを使った戦術。守備はその後最終ライン4枚プラスボランチ2枚を加えた6枚で、如何に組織的に守るかという事を中心にやってきました。そういった中で、最終日に近い6日だったと思うんですけども、韓国のインチョンとトレーニングゲームを迎えた。思いのほかフィジカル向上が出来ていた、守備の構築も一定時間をかけながらある程度の物が出来た。これから先はゲームという中で見る事によって、今何が出来ていないのか出来ているのか把握するには一番だろうという事で、予定をしてなかったゲームを入れたというような経緯です。インチョンとのゲーム、30分3本で1人最低45分、長い選手で60分行いました。目的は先程言ったディフェンス。どれだけ出来るかという所を主眼に置いたトレーニングゲーム、3本目にPKからの失点で0-1。結果的には負けてしまったんですけども、流れの中では組織的に非常に守れてまして、そんな中でも何点か。新聞等々でも出てましたけども、ノースを中心とするコミュニケーション不足から1回ラインを突破された所なんかありまして、まだまだこのチームで向上させて行かなければいけないとこだなと。最終ラインの選手、どのくらい出来るかを見てたんですけども、奈良はライバル心を強く持ってかなり良いレベルでの競争を繰り広げてる。ノースは非常に真面目でチームのやろうとしている事、周りの選手の考えを吸収しようという事を第一に考えてやってる。日高はすごく危機感を持って昨年以上にアグレッシブにトライしている。そんな印象を受けました。その他岩沼、高木純平が最終ラインに入ったりしているんですけども、岩沼は相変わらず漂々と。僕がチームに遅れてグアムに行ったんですけども、合わせるかのように別メニューになりまして。そんなに俺の前でサッカーをやりたくないのかという話を彼にはしたんですけど、お陰様で熊本キャンプからはチームに合流できるという形で最終ラインの選手それぞれがテーマを持って非常に良いトレーニング出来たと個人的に見て思いました。明日、熊本にチームが出発します。その後、19日の北九州さんとのプレシーズンマッチをスタートに22、25、26、3月3日、4日とそれぞれトレーニングゲーム、今現時点で6試合考えています。この6試合に関しては更なるディフェンスの構築、攻撃にも手を加えて行こうと。それと数多いゲームの中で選手の特徴、バランスをすべて把握して行く。良い形で札幌の開幕ゲームに持っていきたいと、熊本キャンプを考えております。ゲームで出来た物出来なかった物を反省し、その反省をトレーニングし出来たかどうかを確認する。トレーニングゲームをひとつのサイクルで考えて行きたいと思っております。ジュニーニョという新しい選手、加入する事をご報告させて頂いているんですけども、熊本キャンプから行ければと当初から考えてました。先程、3時間くらい前なんですけどもようやく日本で働く為に必要な就労ビザが下りました。明日ブラジルを発って日本に来るんですが、予定より2日程度遅れてるという状況です。札幌には13日夜に入って、メディカルチェック等々をしなければいけませんし、外国人登録とか細かい手続きもありまして、そういったものを14日中に札幌市内で行い、終わり次第14日夕方以降、熊本に向けて出発するという形で、チーム合流は15日からという事で、熊本キャンプ12日から、3日程度ですか、ちょっと遅れて来ますけども、そういったスケジュールで来ます。一点だけ、報道でいろいろな名前が出てまして、当たってるなというのと、え？そんなの知らないなよというのいろいろな訳ですが、正直に言いますと、唯一センターバックのとこだけが、なかなか埋まらなかったというのが、実は正直なところなんです。外国人と日本人両面を考えながらチームにプラスになる選手を数名挙げてった訳なんですけども、最終的には実は松尾という選手で行こうという事で決断し、松尾くんにおファシ受けてくれておりました。残念ながら家庭の事情で契約を解除せざるを得ないという形になったんですが、一步踏み込んだ話をしますと、ご家族で体調が優れない方が出てきて、本人としてはやはり看病等々

しながら出来ればサッカーをやっていきたいと考えていると。ご家族の事が心配で、なかなかサッカーに気持ちが行かないというのが彼の現状でした。貴重な戦力として考えてましたので、グアムキャンプはいいよとか熊本キャンプもここまできてもらえればとチームとしても最大限何とか一緒にやれる事を考えていたんですけども、看病の時期が現時点で2月いっぱいまでになるのかそれ以上なのか、それすらもまだわからないと。彼は地元が和歌山で、何とかF C 大阪という地域リーグなんですけども、そこでまず続けながら看病して行くと。只、まだサッカーに向き合うような状況じゃないと言う事で、一応登録はしてるんですけども、たぶん練習参加は早くても3月中旬からになっていくのかなと本人から報告を受けております。皆さんにも一応ご報告しておきます。そういった事がありまして、次に考えたのがジュニーニョでした。その当時一番考えていたのはセンターバックができる事とサイドバックの底上げをしたいなという事で、ユーティリティーさを求めているというのが、大きな所でありました。このジュニーニョという選手もセンターバック中心にサイドバックも、ブラジルではあるんですけども数多くのゲームをこなしております。身長187センチでかなり大柄な選手ですが、非常に技術がしっかりしてまして、特徴的にはビルドアップ。技術としては非常に良い物を持っています。キックの精度も、左利きの選手にありがちな強い物も蹴れるし、回転を掛けるような柔らかいパスも出せる。上背からいってもヘディング、高さでも非常に強いものがあるというのが彼の特徴です。松尾くんの契約解除があってから契約に行ったという事で、チーム合流、遅れてしまった事もあるんですが、一方ではメリットとして考えられると。ブラジルはもうリーグ戦が始まっています。ジュニーニョも今シーズン既に4試合程度公式戦をやっているという中で、フィジカルコンディション含めいつでもボールを蹴れるというような状態で札幌に来れますし、熊本に合流できる。1日くらいは時差の関係で別メニューになると思いますけども、その後すぐにチーム練習に合流し、やって行けるのかなと。ですので、ゲームに関しましても、19日のプレシーズンマッチは登録の関係とか、ただのトレーニングゲームじゃないもんですからいろいろ細かい物もあって、ちょっと難しいかなと思っているんですけども、その後の22日以降からのトレーニングゲームではしっかりと彼の良さを引き出し、同時にコンサドーレの目指すサッカーを実践してもらえなと思っております。そういった中で、熊本キャンプ良い形でやって札幌に帰って来たいと思ってます。札幌に帰って来た時、ここにいる皆さん方が昨年の最終戦のようにチームの力、140パーセントぐらい出るような環境を作る事を是非ご協力頂ければと思っています。今シーズン、新しい選手もそうですけども、特に昨シーズンから在籍した選手と契約交渉の場で話す中で、最終戦の話は非常に選手にとっても大きかったんだという事を改めて思いました。いつも選手に何かないかといろんな事を聞くんですけども、言う前にあの最終戦の雰囲気、サポーターの力が、いつでもしてもらえよう自分達が頑張らなければいけないという事を、彼らからいろいろ言ってくれました。そういう事も含めた中で、是非札幌での開幕、また皆さんの力をお借りできればなという風に思っております。要点の得てないような話だったかもしれませんが、チーム編成、目標、グアムキャンプでの状況、今後の熊本キャンプについてお話すると同時に、皆さんにお話ししなければいけなかったなと思ったキリノの移籍、松尾くんの契約解除、ジュニーニョの状況、お話をさせて頂きました。今お話した事、もしくはそれ以外の事、全然構いません。皆さんから少しでも多くの意見と質問、何でも構いませんので、コミュニケーション取れればと思っていますので、残り時間そうさしてもらえればと思っています。有難うございました。

司会：はい、有難うございます。(拍手) では質問タイムに入りますがその前に、我々のホームページにいろいろアウェイサポからも質問が沢山来てますが、名乗ってない方の質問とかは取り上げたくないので、実名を名乗ってらっしゃる方いらっしゃいますので、その質問をひとつ。関東サポのモリミさんという方なんですけども、キリノの復帰に付いて監督も快く承諾した上での決断でしたでしょうか、という確認なんですけど。

三上：はい。結論から言うと承諾というか、力になるねと。ただ、監督から当時あったのは、今後J1でやっていく上では、まずボールを収めれる選手が必ず必要になると。そういった意味でいうとキリノの最大の特徴

とは違う選手になる。当時例えばジオゴもいてキリノもいてくれるのが一番良いというような事で、そういった選手があった上でキリノというスピードある選手をチームに迎え入れてもらう事が望ましいと。最終的には大島くんという選手をその枠で考え、監督も非常に期待すると同時に彼のような特徴を持っている選手がいるのであればキリノの特徴が更に生きるんで、大きな力になるだろうとOKが出てました。ただ先程申し上げたような他クラブからのオファーなんかがあったので、監督自身もヤキモキしながら経緯を見守っていたというのが実情です。

司会：はい、有難うございます。それでは会場内からのご質問受けますけど、ワイヤレスありますか？ 後ろありますね。では会場から三上部長にご質問ありましたら、挙手をお願いします。はい、お名前を名乗ってからご質問、お願い致します。

挙手者：サイトウと申します。宜しくお願いします。選手の話等を頂いたんですけども、道新さんになんかにも既にレポート出てるんですけども、ゴールキーパーについてお話頂けないでしょうか。この選手は今こういう状況で、例えば新しく来た選手はこういう評価だとか、そういう話をお願いします。

三上：はい。では、僕の見たとの感想と赤池ゴールキーパーコーチの考えている事を踏まえながら。チームに合流してしっかりとトレーニングやっているのがホスン、高木、新しく入った杉山哲と、3名の選手です。まず3人について。ホスンは昨年の経験が非常に大きかったのか、グアムキャンプからも非常に伸びたというか、昨年の最終戦から更にスケールが大きくなったというような状況です。ただ、彼の課題はミドルシュートからの失点を減らす事と、もっと最終ラインとのコミュニケーションを取る必要があると。十分日本語でコミュニケーション出来る力はあるんで言葉の問題ではない。ここがJ1ではもっともっと求められるだろうという事で、この2点を中心にトレーニングを前向きに行っています。高木は前回うちに所属してた事も踏まえて僕自身も長い付き合いで、どちらかというと岩沼同様漂々とやっている選手なんですけども、今年にかける思いは非常に強いんだなという事を感じてます。昨年怪我がなければもしかしたら正ゴールキーパーだったかもしれない所から、最終的にはホスンに正ゴールキーパーの座を奪われ、そういった思いが今の彼を突き動かしているんだろうと思うんですけども、非常に精力的に、過去にないくらい姿勢を見せています。特に練習前、練習後のケアと準備は非常に凄いなと。その準備を行ってるからこそトレーニングゲームやトレーニングでも良い状況で、パフォーマンスを発揮している。赤池コーチからはその攻撃に繋がるフィード、そこがまだまだ改善する余地があるねという事を課題として与えられているという状況です。3人目、杉山哲。新しく入って来た選手なんですけども非常に良いキーパーです。彼が元所属した所は曾ヶ端くんという高い壁があったので、なかなかチャンスなかったと思うんですけども、実は大伍がああいう形で鹿島に行った事もあって、例年以上に鹿島のトレーニングとかトレーニングゲームを見る機会が多く、杉山くんのプレーは見させてもらっていたんですけども、非常に高い能力あります。チームに来てからもその高い能力を出してくれてまして、飛び出しであったりクロスに対するボールの出るタイミングであったり、非常にアグレッシブです。そういった意味で頑張ってくれてますし、何より彼自身、やはり試合に出なきゃいけないという強い思いがゴールキーパー3名を良い意味で触発している大きなエネルギーになっているなと思ってます。現状としては、コーチングとかは彼が一歩リードしてるかなと。それだけでファーストキーパーという訳ではありませんけども、コーチングに関しては彼が一歩リードしていると赤池コーチが言っていましたね。そういった中で、やはりシュートストップ。アグレッシブさと同時に安定っていうものを如何に出せるかという所を課題として与えながら、杉山の方はやっている。怪我で曳地が別メニューで、グアムには帯同してたんですけども順調に回復してまして、熊本キャンプからは簡単なトレーニングをされる状況で、予定よりちょっと早いぐらいのリハビリ状況です。彼自身にも話した事は、怪我をしてしまった事は仕方がないけども、帰って来た時に怪我が単なるマイナ

スだったのかプラスだったのかは曳地次第だよと。彼はそういった中でゴールキーパーの映像を数多く見たり、下半身に負荷の掛からない中で体幹を鍛えたり、僕から見てもこの怪我が無駄ではなく、きっとプラスになっていくだろうなというような形でやってくれてました。もう一人、高原に関しては皆さんもご存じのようにグアムキャンプには帯同せず、こちらの方に残っていました。残念ながら昨年末オペをする事になりましたので、その執刀医の下リハビリを東京でやっており、熊本キャンプからの合流を目指していたんですけども、あと1週程度やった方が彼の為なのかなと。彼本人、主治医のドクター、うちのトレーナーと話しまして、最終結論としては1週間程度熊本キャンプに遅れて合流させようと。それまでは引き続き東京の方でリハビリをと考えております。ざっとなんですけども、ゴールキーパーについてお話をさせてもらいました。

司会：はい。有難うございます。じゃ、その他ご質問ございましたら挙手お願い致します。あっ、はいどうぞ後ろの方、お名前を名乗ってからお願い致します。

挙手者：すいません、高橋といいます。よろしくお願いいたします。

三上：よろしくお願いします。

挙手者：ノースの事について、もうちょっと詳しくお聞きしたいんですけども。たぶん櫛引君、奈良さんが世代別代表に獲られる時の事も考えての事だと思うんですけども、山下がいた時点が抜けてからか分かんないんですが、たまたま外国人だったのかそれともノースを前から見ていてか、そこら辺お話出来る程度でいいのでよろしくお願いいたします。

三上：はい、7割まずノースという形を見てました。F C東京さんではなかなかレギュラーになれなかったんですけども、彼がF C東京の練習参加する前から、オーストラリアでやっていた事とかその後韓国Kリーグでやってた事は知ってまして、いかなる守備において能力の高い選手だなと実は前もって思っていました。鹿島の杉山哲を見る事が多かった様にF C東京でいうと上里なんかが昨年行ってた事もあり、見る機会等々ありました。昨年シーズン前、オーストラリアとかKリーグで僕が知ってた時と含めても随分やっぱいい選手だなと。最終的には石崎にもF C東京の練習を内密に見に行ってもらって確かめてもらったんですけども、まあ僕の中でかなり守備としては大きな力になるなと。これは間違いないなと思ったのは今野に聞いたら、間違いないですと言ってくれましたので、それでノースに行かせて頂きました。もう少し何かお聞きしたいところあればお答えします。

司会：はい、後ろの方どうぞ。お名前を名乗ってからお願いいたします。

挙手者：オオサカと申します。

三上：よろしくお願いします。

挙手者：2008年のJ2降格から得られた教訓を活かしたいと思うんですけど、どのような教訓でしょうか。

三上：そうですね、2008年三浦監督時代に昇格できてその後降格。そのサッカーの中で守備を構築したいという狙いがあったんで三浦監督にお願いをしてたんですけども、J1で安定した戦いをしていく上では攻守両方でないといけないなっていうのがまず当時思った事です。先程石崎の考え方でも言いましたが守備を

安定させない事には難しいと。うちのようなクラブの場合は、個の力で相手を守り通すというのは、正直現時点では難しいと思ってます。いかに組織グループで守備を構築できるかというところが大きなウエイトになると当時思っていましたので、まずその構築をすることもあって三浦監督にお願いし、それをしっかりと実践。監督以下選手してくれたんですけども、J 1 を当時戦ってみてやはり守備一辺倒ではなかなか勝ち点を上げれない。自分達のサッカーを貫く事が難しいという事がその時感じた事です。皆さんにしたら、そんな事やんなくてもわかるんじゃないのと思うかもしれませんが、正直いろんなこと真剣に考えて、当時の監督クラブみんなで考えてその様な結論で行っておりました。そういった中で、やはり守備一辺倒では難しいなという事が一つ。もう一つは冒頭でもお話した通り期限付き移籍選手に大きく頼っていてはチームが表そうとする、要するにベース。昨年まで築いてきたベースを J 1 という舞台で表現するのは難しいなというこの2点が正直一番大きく反省をしたところでした。その反省を踏まえた中で先程お話をしたような継続というものを逆にうちは武器にしようというふうに思って今年のチームを作りましたし、守備一辺倒ではなく攻撃においてもシュートを撃つ攻撃という事を意識するためには、中盤の選手。特にそういう選手にボールを動かせる特徴のある選手を持たなければそれを表現するのは難しいなという思いで編成をさせていただきましたので、2008年の反省を基に今シーズン活かしたいと、その様な状況です。

司会：はい、ありがとうございます。他にご質問ありませんでしょうか。はい、どうぞ。お名前を名乗ってからお願い致します。

挙手者：鈴木と申します。よろしくお願いします。

三上：よろしくお願いします。

挙手者：今年ユースから大量に若手の選手が昇格されましたが、Jリーグで若手選手をどのように育てるかという中で実戦機会というのがそうそうないんじゃないかと思うんですけども、どうお考えか聞かせていただければと思います。

三上：はい、まず北海道という土地柄、すごくそこに関しては考えなければいけないなと思ってます。ただ、今シーズン34名体制の中で、紅白戦等々を積極的に行なえる環境を作る事が出来たと。同時に5人の選手の多くは先ずプロのスピード、生活そういったものをいろいろ学ばなければいけないと思ってます。当然ゲーム感覚で養う部分は大切な物もあると思うんですけども、彼らには今直接言ってるのはプロとしての生活リズムであったりサッカーの質であったり、体作り、そういったものをまず1年通してやってもらいたい。その次のステップとしてより実戦経験が必要になってくると思ってます。その時の為に、昨年例えば行ったコスタリカとかエクアドルとか、実は南米視察行かせてもらったんですけども、そういうチームと現時点ではまだ業務提携しておりませんが、1年後2年後うちの若い奴を受け入れてもらいたいという事で内諾を得てる様なクラブもあります。一つの方法としてはその選手の性格を踏まえながら海外留学もやって行こうと思ってますし、先日新聞でJリーグサテライト復帰かというような記事も出たと思いますけども、僕は是非そうしてもらいたいと思っております。当時Jリーグからサテライト廃止ってなった時も、うちのクラブだけが実は反対をしておりました。残念ながら多数決では勝つことが出来ずに廃止になったわけですけども、その後日本サッカー協会を通してサテライト復活をずっと技術委員会に話してまして。まあ一番大きいのは僕のような小さい声ではなく、オリンピックでなかなか良い成績が出なかったという事で重い腰を協会さんが上げてくれて、もう一回検討するという事なんですけども、是非復活すればいいなと考えています。新入団に関しては本人と親御さんに明確に今年1年こういう形で育成していきたい、来年選手がこういう状況であればこういうプラン、こう

いうプラン、こういうプラン、このどれかの一番良いと思われるプランで育成していきたいという話をしています。今の質問と変わるかもしれませんがむしろ横野とか三上とか、より実戦に経験をさせなければいけないレベルだなと思ってます。例えば期限付き移籍させてそこでっていう所もあると思うんですけども、本人との話し合いの中でまだコンサドーレ札幌で彼らを向上させれる環境があると。要は試合出場の経験。最終的な本人との話し合いで引き続きコンサドーレ札幌のユニホームを今期着てもらう事で考えております。質問からずれてしまったかもしれませんが、ユース選手に関してはその様なプランでまず考えてます。

司会：その他ご質問ございませんか。なければ珍しく予定通り三上部長が終わりましたので。

三上：よろしいのでしょうか。

司会：よろしいですか。はい、ありがとうございました。

三上：ありがとうございました。

司会：それではこの後、先程社長からのいろいろな経営に関する部分ですとか、チーム方針に関してのお話の質問というのを受けたと思います。社長、ご着席のままで結構なのでお答えお願いいたします。では挙手をお願いします。はい、どうぞ。お名前をお願いします。

挙手者：はい、改めまして函館からまいりました斎藤でございます。函館開催が今年ダメになった経緯はよくわかったんですけども、先程今後も引き続き可能性は探っていくというお言葉があった中で、私函館人としては例えば99年度にコンサドーレで函館選抜との親善試合という形での開催をしていただいた経験がございます。それと同規模とは申しませんが、それこそサテライトリーグがもし復活するのであれば開催ですとか、例えば天皇杯の初戦の開催ではどうかとか、そういった形も検討していただければと。これは質問というよりもお願いに近い話になっちゃうんですけども、もしできることなら願いたいという事でございます。

矢萩：先程もお話しましたように、コンサドーレとしては函館室蘭とのかかわりは充分意識してますし、これからはなんらかの形で。過去せっかく培ってきたそういうコミュニケーションは維持していきたいという思いは相当強くあります。ただいかんせんリーグ戦に関しては先程お話したような流れがどんどんこれからは、スタジアム基準の規格が厳しくなってくるという事は充分想定されると思います。実は今シーズンもナビスコカップの内一試合だけ6月土曜日に開催される可能性があった。6月9日だったと思うんですが結局アウェイに。もしその日がホームであればナイターという事も関係ないですし、なんとかJリーグ実行委員会に。いわゆる基準に満たないスタジアムで試合を行なう場合にはJリーグの実行委員会及び理事会で承認を受ける手続きがあるんですけども、実はその文章まで作ってなんとか函館室蘭でやりたいというところは最後まで模索しておりました。ただ今回の日程では両都市での開催は断念せざるを得なかったという事は改めてご説明したいと思います。先程強化部長が話しておりましたサテライトの話はまだ実行委員会では全く出ておりません。来週14日にJ1J2の合同実行委員会がありますからその時にまた詳しく聞きたいと思うんですけども、以前は例えば帯広とか士別まで行ってやってまして、それについてはクラブとして若手の実戦経験を増やす場であると。同時に北海道のコンサドーレとしてなるべくどういう場面でもいいから試合を札幌以外の場所でやりたいと今も思っております。サテライトであれば会場についての問題はクリアできると思いますので、是非函館も含めて他のエリアで出来る道はいろんな形で探していきたいと思ってます。ただ選抜との試合とかになるとまたちょっと違う形になりますので、そこまで突き詰めた想定はしてないんですけども、特に函館について

はある意味各地区協会の中では札幌より1年歴史が長く北海道の中では一番昔に発足した伝統あるサッカー協会だと。そういう認識もありますので、是非コミュニケーションを維持するためにも何らかの形試合開催という事は常に頭の中には入れて置きたいと思っております。

司会：はい、ありがとうございます。その他ご質問ありましたらお願い致します。はい、こちらの前から3番目の方お願い致します。お名前を名乗ってからお願い致します。

挙手者：キクチと申します、よろしくお願い致します。LET'S ROCK! に関しての質問なんですけど、去年若葉の皆さんとちょっとお話する機会があつていろいろ伺ったんですけど、CD発売してもスタジアムで発売してなかった。それで確か去年最終戦だけしたような気がしたんですけど、発売時にクラブとしてもっと大々的に発売しましたっていうのをいっぱいPRして、スタジアムでも毎試合発売するようにしてもらいたい。今年もナイトd e ライトがグランプリ獲ったんですけど、今年は去年の反省踏まえてナイトd e ライトもクラブとして売り出す様な感じでやってもらいたいなと思ひまして、要望です。

矢萩：去年は最終戦以外にもCDの発売はしました。ただ毎試合でなかったっていう事もあるんですが、厚別もドームもそうなんですけれども、物を販売するにあたって販売手数料が会場側に払わなきゃなんないという問題があつて。2, 3日前の道新にも載ってたカムイレコードの上田さんっていう方なんですけれども、そちらともいろいろ話てる。去年の反省も踏まえて是非出来れば今年は。我々の方はスタジアムで毎回売る事自体は全然問題ないと思つてますし、積極的にアピールしていくっていうのは是非やりたい。一つの反省としてはスタジアムだけではなく、できればグランプリを獲ったバンドだけではなくて最終予選に残った5バンドを含めてトータルでCDを作ろうとか。それからそういったところが集まったライブをコンサドーレも絡んで他の会場でやりながら、公式ソングとしてのアピール。中心になつてるカムイレコード、審査員に入ってるラジオ局、我々も含めてもう少しプロモーションキャンペーンを目立つ形でやろうと去年の反省に立って考えておりますので。今年は今のところ開幕戦にグランプリのバンド、『終わらない夢』ってタイトルはわかってんですけどナイトd e ライトでしたっけ。そうですね、こないだ聞きにいったんですけども、開幕戦初め何試合かで生ライブをやる。プラス会場外でももう少しお互いにアピールする機会を増やそうという話をしておりますので、今のご指摘の点については一歩踏み込んだ形で今年は展開していきたいと思つております。

挙手者：わかりました。ありがとうございます。

司会：はい、ありがとうございます。じゃあその他にご質問承ります。はい、後ろ、武田さんどうぞ。

挙手者：すいません、武田と申します、よろしくお願い致します。昨年恐らく黒字決算だと思うんですけども、ダニルソン移籍金も入つての事だと思います。で、今までどうもHF Cの決算とか見てると今野選手だとかダビィだとか、移籍してつた選手は翌年度の決算に収入として入つたようなんですが、会計基準を変更したのかどうか分からないんですが、昨年度だいたい選手の場合は1月31日までの契約期間だとか天皇杯の関係もあるもんですから元旦までの契約期間とかそういうのが多いんですけど、昨年度の収入という形になりました。お金が何時入つたとか、会計基準が変わつたのかも僕はわかりません。先程お話聞くと、去年は確かに黒字だったようだけど債務超過解消にまではいたらなかったと、まあこういう形であるとかなかなかちょっと厳しいのかなと。昨年のサポ集会で矢萩社長自身が毎年道と札幌市に対して5000万+1000万で6000万ずつ返済していると。で、予算規模10億円を超える程度の会社が毎年道と札幌市に対して6000万ずつ返済する事は相当重いことだとおっしゃってました。こうやって借りてる金がなくなれば債務超過でな

くてもキャッシュフローがだいぶ余裕が無くなってくると思うんです、毎年毎年。これも矢作社長充分理解されてると思うんですけども、スポーツ興業っていうのはチーム成績によって収益が大きく変動しちゃうものなんです。僕はまあサポーターとしてももちろんコンサドレーを今年ね、J 1で活躍して欲しいと思うんですけども、例えばモンテディオ山形みたいにJ 1在籍1年目は黒字なんですけど、2年目3年目というにしたがって赤字になっちゃって。あそこは社団法人ですから民間企業とちょっと違うんですけど、民間企業としてみれば債務超過みたいになっちゃったと。どうしてかって言うと、J 1残留できたとしても下位に沈んじゃうもんですから負け試合がどうしても多いんですよ。去年みたいにJ 1昇格争いをして行くと最終戦4万人近いお客さんも来ると思うんですけども、そういう風にはなかなかすることは難しいと思うんですよ。今年残留したとしても来年以降観客動員数が減るんじゃないかなと思うんですよ。で、もしこれ以上今年以上の観客、残留できるかどうかわかりませんが得るとするならば、J 1で例えば優勝争いでもするというんであれば別ですけど、そうでなければなかなか観客動員数もちよっと増えないと思うんですよ。ちょっと前ですけどツイッターとかでも見かけたんですけども、HFCの増資については持株会もなんか否定的な意見が大勢であると聞いてます。前回2008年に増資した時もニトリさんとかも増資に参加してたんですが、一番出資したのは持株会です。1億2000万円位だったと記憶してます。現状見てるとHFCの将来っていうのはあんまり明るくないんじゃないかなと僕ちょっと考えてしまうんですよ。矢萩社長も一生懸命頑張ってお仕事されてるっていうのは充分わかってるんですけどなかなか。僕が矢萩社長の立場だったらもっとひどい結果になるかもしれないですけどもね。申し訳ないんですけども道新のグループから来て、これは命令だと思うんですけど立場上異動で来てやらされてるって、そう感じるんですよ、多少ね。もちろん一生懸命頑張られてると思います。で、いろいろ行きがかりのない形でJリーグから何なり、例えば他の山形とかそうですねでも人材を派遣してもらって、例えば社長とか就くと。そういう風な意向というのは無いんでしょうか。

司会：ご質問者のご質問内容が複数に渡るようなんですが。

矢萩：頭に入ってますんで。ある意味いつでも言われてる事ですので、おっしゃる事は良く理解できますし、私もその通りだと思う部分があります。私が社長で去年で4年目やってるわけですから、赤字が続いて結果債務超過になったという事については当然その責任は私が全てを負わなきゃなんないという事も充分認識してます。ただ先程お話しましたように、過去のいろいろな事もありますが、そういう意味も含めて。それからもう一つ、クラブライセンスが今年からスタートするという事も含めて今年の予算に関しては、これはまだ株主総会でも発表してませんから詳しくお話ししておりませんが、基本的にはもちろん必ず黒字が出る予算を昨年度以上に慎重に立ててやっておりますので、相当の覚悟と自信で必ず黒字決済に持ち込んで、来年以降につなげるシーズンにしたいと思ってます。それから持株会の話、これも相当デリケートなお話なんで、あまり詳細を今の時点ではお話しできない部分もあるんですが、持株会の大半が増資に反対だという事はありません。もちろん持株会理事会としてはもしこれから増資を正式に我々の方から提案した場合には理事会を開いた上で最終的に持株会としてその増資要請に応えるかどうかを審議するんですけども、去年10月末もしくは11月に開いた理事会。これは増資をお願いするためというよりは、クラブの状況を説明した上でJ 1昇格の為にこれからこうこうこういう事がありうるっていうような事をご相談した理事会っていう位置付けだったんですが、その中で一部、増資に否定的なご意見は当然のことながら、何人とは申し上げませんがありません。ただその時点で増資を否決するとか否定するとか、それが大勢を占めたという事ではありません。4年前に減資を行なった上で増資をやって4年しか経ってないという事は充分認識しておりますけれども、ただ昨年度で例えばダニエルソンの移籍金を入れたとしても債務超過を解消できないという現実がある場合、それと片方Jリーグにそういう方向で債務超過を解消しますという説明をしている以上、選択肢としてはそう多くはない。その中の一つに増資があるという事については改めて持株会にご説明した上で、なんとか私の責任でご理解は

頂けると思っております。それからダニルソンの移籍金自体を昨年度の決算に経常するうんぬんについて。Ｊリーグのクラブの中でも、監査法人トーマツが入って一番厳しく予算決算を管理されてる会社で、こういう数値的なものを一番透明性ある形で全てを明らかにしてるクラブでございますので、昨年度の決算に繰り入れる事については了解をもらった上での決算処理ですから処理方法が変わったという事でもございません。今までと同じ処理方法の中で、たまたまそうなったと。たまたまダニルソンの契約はそうではなかったという事でご理解頂きたいと思います。ただいずれにしても経営を預かる最高責任者の社長という立場として現状こういう状況にある事については、株主の皆さんも含めて大変申し訳ないとは思ってはおりますけれども、それをもってコンサドーレの将来が決して明るくないというふうには私は思っておりません。これは責任を回避するとかそういう事ではなく、これから時間かかるかもしれませんが、とりあえずクラブの一番手前の目標であったＪ１復帰を果たした上で、経営的にも今年から改めて。増資のお願いはする事になると思いますけれどもそれで債務超過をクリアした上、今年度からきちっと赤字が出ないような予算管理をする事について今立てております。Ｊ１で最低のトップチーム人件費でチームを編成したけれどもこういうチームを作るというお話については、私からも強化部長からもさせて頂けましたので、次の目標であるＪ１定着それからさらに上を目指す。経営的には今年からきちっとクラブライセンス制度をクリアできるような経営を目指すという事については、それなりの自信って言ったらおかしいですけども、今年の予算についてはそれだけの自信はあるという事でございます。数字のお話をするとなすなす皆さんせっかく盛り上がってる気持ちに水を差す部分もあるかもしれませんが。けれどもそれはそれである意味コンサドーレ、北海道フットボールクラブの現状です。そういう状況をもってコンサドーレの未来は明るくないという風に思われるサポーターが少しでも減るようにこれから努力していきたいと思っております。

挙手者：どうもありがとうございました。

司会：ありがとうございます。他にご質問ございませんか。はい、前のサポート。

挙手者：宮本と申します、いつもお世話になっております。自分の感想なんですけども、昨年後半からいろいろホームページ等で例えば選手がテレビ出演しますとか、ラジオとか雑誌に載ります、それから例えばスポンサーさんのホームページに載りますという告知が非常に多くなってきて、こちらサポーター見る側にとっても「選手出るんだ」「この雑誌に載るんだ」という機会が増えて非常にいい感じで告知が出来てるのかなと。今年になるとＪ１になってさらに。年末全国放送で中山選手が出たりですとかマスコミも雑誌もそうですし、テレビも地上波があったりＢＳ、スカパーがあったり。これから選手それからコンサドーレ関連の記事、放送が多くなると思うので昨年同様できる範囲でホームページ等でそういう告知を引き続き続けて欲しいという要望、お知らせでした。

矢萩：ありがとうございます。まだまだ広報告知体制について充分といいきれない部分がたくさんあると。まずはここ３年間ぐらいで選手をテレビに露出させる機会。これはもちろんテレビ局さんのおかげもあって飛躍的に増えたのかなと思っております。ただいつもご指摘いただくんですが、もう少し決まった時点で速やかに皆さんにお知らせした上で、確実にご覧頂く所については、まだちょっと発表のタイミングが遅かったりとは思いますが、昨年リニューアルも含め基本的にはホームページ上を中心に。それからメディアさんについてはその都度リリースでご案内を差し上げてます。なるべくたくさん取り上げられるようなコミュニケーションの強化も含めてやっていきたいと思ってます。先程主要スポンサーさんが殆んど増額要請を受けて頂いたってお話したように、Ｊ１に上がるという事がメディア効果も含めて最大のチャンスだと思ってますので、改めて今年広報対策については今ご指摘いただいた部分も含めて万全を期して、さらにクラブ価値が上がるよう

に努力していきたいと思います。

挙手者：ありがとうございます。

司会：はい、ありがとうございます。その他ございませんか。

挙手者：はい。

司会：はい、すいません、前から2番目の方。

挙手者：伊藤と申します、よろしくお願いします。オフィシャルサポーターズクラブをやっている者ですが、かなり数がジリ貧になってきていると思うんですね、当初と比べて。新規登録も殆んどないような感じがしているかなと思うんですけども、今後の扱いっていいですか、どのようにお考えでしょうか。

矢萩：去年からクラブコンサドーレという形で一部ファンクラブの形態を変えたところを始め、我々の周りにサポーターの皆さんの組織がたくさんあります。その中にオフィシャルサポーターズクラブも長い歴史を持って存在するというふうに思っております。ただなかなか我々の発信力としては、これだけたくさんあるんですが。クラブに近い所にいない一般の方々から見ればどういう形でコンサドーレの応援にかかわるのか見えきれない部分があって、その中の一つにオフィシャルサポーターズクラブもあるのかなと思ってます。数が増えてないという現状も認識しておりますので、J1復帰を機にさらにサポーターの輪を広げていく一つのあり方としてオフィシャルサポーターズクラブがあって、こうこうこういうふうになれば参加できるんだよという事も含めてクラブを取り巻くいろいろな組織にもう少し積極的に広報していきたいとは。これも言い訳になっちゃうんですけども広報宣伝予算がそんなにたくさん。もう少し広く予算をかけてでも告知できるというのが一番良いとは思いますが。これから開幕戦、シーズン節目節目でそれなりの予算を特化した試合を中心に告知活動をやっていきますので、その中で今ご指摘があったオフィシャルサポーターズクラブも含めてコンサドーレを取り巻くいろいろな組織がもう少し一般の方に広く伝わるような告知は心がけていきたいと思います。よろしくお願いします。

挙手者：ありがとうございます。

司会：はい、では他ございませんか。なければこれで社長への質問は終わらせて頂きます。あと、サポーターからサポーターへのお知らせをお持ちの方いらっしゃいませんか。はい、では本来ですと長島さんがこの席に来て、ビラ配りその他のお話をする予定でしたがインフルエンザで皆さんにうつしては大変だという事で、長島さんの方から言ってくれという事で3月3日ビラ配り、いつもの。詳細は近くなりましたらホームページその他、オフィシャルブログなんかでも上がってくると思います。それとこれは勝手に決めていいのかどうか。この流れでいくと3月4日辺りが雪割りという予定になるのかな、ですよね社長。決定ですか、勝手に先走ってフライングしましたが、今までの流れで行くとそうなるのかなと思ったもんですから、3月4日雪割り決定だそうです。その予定でございますので、近くなりましたらいろいろホームページ等でアップされると思いますのでよろしくお願いします。それでは休憩に入ります。後ろの時計で3時15分まで休憩とさせていただきます。よろしくお願いします。

---休憩---

司会：まだ休憩中でございますけども、毎年ですがこの会は皆さまのカンパ、ご寄付で成り立っております。後ろにカンパ箱もございますので、もしよろしければ若干で結構ですのでご寄付の程を宜しくお願い致します。悪い宗教団体の様になってますが決してそうではございませんので、よろしくお願い致します。

---休憩---

司会：1分早い程ですが、始めたいと思いますので、後ろをお締め下さい。安中君達はこっち座って頂いて。ではまず最初に北海道フットボールクラブさんで、今日ご出席の方々のご紹介を頂くという事です。社長よろしくお願い致します。

矢萩：すいません、私と強化部長だけしゃべってて、ご紹介を遅れて申し訳ありません。今日出席させて頂いてるうちのメンバーを紹介させていただきます。岡田専務です。(会場拍手) それから、今年1月から加わって頂いております、町田顧問です。(会場拍手) それから、三谷営業部長です。(会場拍手) それから、プロモーション業務部専任部長の渡辺です。(会場拍手) 渡辺は主に運営を担当してます。それから同じくプロモーション業務部次長の林です。(会場拍手) 林は主にCVSの担当をしてます。この他に、今日来ていない所ですと総務部それから先程ご紹介しましたマーケティング企画部、昨年11月からできた部です。それから広報部、そういった部がフロント組織としてありまして、あとは先程の三上がいた強化部と育成をやってる育成部と、そういう形で日常業務を行なっております。改めてよろしくお願い致します。(会場拍手)

司会：はい、ありがとうございました。それでは冒頭お約束しましたようにウルTRASサッポロのお二人をお招きしましたので言いたいこと、たくさん語ってもらおうと思ってます。まず自己紹介をお願い致します。

安中さん（以下安中）：始めまして、安中と申します。俺の話は結構どうでもいいと思うんですけど、なかなかこうやって話す機会もないかなと思うんで。折角の機会なんでいい時間にしたいと思います。どうかよろしくお願い致します。(会場拍手)

上村さん（以下上村）：はい、上村と申します。よろしくお願い致します。自分は96年から応援してるんですけども、ここ最近ほとんど試合には行けてない状態であまり話すことはないんですけども、こういう時間を頂いたのでありがたいなと思っております。よろしくお願い致します。(会場拍手)

司会：今年安中君に来てしゃべって欲しいって私の方からお願いをして、ご辞退しますみたいな話の中でなんとかお願いしますということで口説いて来て頂いたわけです。皆さんはどうなのかですが、私は非常に今までの中で去年の昇格はちょっと違った雰囲気だったかなと思ってます。というのは、それまでの昇格は目玉になる外国人選手がいたりすごいキープレーヤーがいて、それこそシーズン当初から連勝につぐ連勝みたいな形です。シーズンの後半では昇格が見えてくるみたいな状態でしたけども、去年はスタート時期はあんなグダグダな状態から始まって、最後はサポーターと選手とみんなが一体になって昇格したというのが非常に手ごたえとして大きかったもんですから。その辺の所をちょっと聞きたいと思って来ていただいたという事です。古くからのサポーターの方はご存知かと思いますが、昔斎藤さんというコールリーダーがいらっやって、非常にカリスマ性のある。今はスポーツライターをやられてると思うんですが、その方の時代はサポーターが叫びたいようなコールをピタッと、そのタイミングに合わせてしていただけるという本当にみんなが尊敬してたサポーターの代表みたいな感じで。その後いろいろなコールリーダーを経て今安中さんになってる。安中さ

んのコールの仕方というのは途中結構US自体のスタンス。ずーっと同じ応援を永遠長時間繰り返すのは止めて欲しいとか、もっとアウェイの様に瞬発力のある応援を短時間で区切って欲しいとか、いろんな意見が過去にもサポーターズ集会に出てたと思うんですね。US自体としてもいろいろな考え方があって応援の形態をとってたと思うんですが、そういった部分で去年は特に短い瞬発力のあるコールを繰り返した。トランス状態になるような単調なリズムの応援を延々繰り返すっていう事が去年特に少なくなって。いわゆるコンサドーレマダムには相当人気が高い安中さん、そういう形で女性のサポーターからは非常に人気だというふうに聞き及んでおります。いろいろな考え方があってここに至ったんだと思うんですが、今までの応援スタイルとみんなで話し合っただけで変えていこうなどあったんすかね。その辺を聞かせていただけませんか。

安中：マダムからの振りでこれ。

司会：いやでも、結構女性サポが好きですよ、安中君。安中さんステキっていう人、ちょっと手を上げてみても。あれいいない？ほれほれほれ。まあそれは別にして、何にしてもやっぱりサポーターから人気があるっていう事はいい事ですからね。ちょっとまじめな話に戻して、応援のスタンスという物をどう考えてたのか。スタジアムでもいろいろとしゃべってくれてはいるんですがもう一度聞かせてもらえませんか、その辺を。

安中：まあ自分もウルTRASサッポロとして団体で動いてますので。まず自分が思ってることが全て団体の考えている事ではないという事。とにかく自分はスタジアムを変えたかったんですよ、コンサドーレ札幌の。さっき途中から来たんですけど、会社の経営とかそういう事ってぶっちゃけ言われても俺良くわかんないんですよ、あんまり。債務超過がいくらとか言われても。その辺は、突っ込む所は突っ込んでいいんだろうけど、社長がやってくれるはずなんで。逆にサポーターとして出来る事ってそういう事も大事だけど、もっとちがくて。じゃあスタジアムを変えて新しいお客さんに、ああコンサドーレのスタジアムはこんなにすばらしいんだとか、スタジアムを一つにしてやってく事とか。そういう事をもっともっとやってかないとスタジアムに未来はないんじゃないかなと思って、いろいろとやってきたわけなんですけど。さっき言ったコールがどうかこうとかっていうのは、実際問題コンサドーレのサポーターの年代層はやっぱり高いなっていうのは正直、パッと見た所で。本当はこうやってやりたいああやってやりたい、スタジアムももっとこうしたいとかっていうのは理想の中ではあるんですけど、現状できる事からやってかないと理想とするスタジアムにもならないかなとは思ってました。なんで、例えば今ゴール裏にいる人たちでいろんな年齢とか性別とかあって、現状どんな応援ができるかと思ったときに、今自分がやってる感じがはまるんじゃないのかなと思ってやってただけなんですけど、あんまり深くは考えてないんですけど。2008年に1回降格して、応援自粛ありましたよね。あんまり降格したのが厚別の確か柏戦で、あの後からスタジアムに入れなかったんですよ、残り5試合。知ってる人は知ってると思うんですけど。それで確か渡辺さんに。違いましたっけ？あれ？仙台でしたっけ？2回目だったんですよ。仙台は悪かったんですけど、勝ってただフッキに抱きつくだけに飛び降りたってだけなんですけど。そんなのどうでもいいですけど、2008年の降格があって応援自粛の時って自分がスタジアムに入れなくて、そん中で話が進んで、あんまり携われなかった。翌年丁度自分が、前やってた人が変わったんですよ、2009年に。自分としても結構微妙というか、周りから見られる眼っていうのも、なんだよ砂川みたいな感じもあったと思うんですけど。その中でもあの時明確にしたっていうのは、フロントとサポーターと選手が変わんなければコンサドーレに未来はないよっていう事に関してはすごいみんながわかってくれてたはずだと思うんですね。じゃあサポーターが出来る事はやっぱりスタジアムを変えていく事なんじゃないのかなと思ひまして。今までの札幌サポーターって俺の中では勝ったらいいだけ喜んで、じゃあ負けたらどうなのよっていう、ただ目先の結果だけを追いかけてただけで、あんまり深く考えてないというか。それはコンサドーレって結構割りと強い時は強いけど勝てない時はずっと勝てないっていうか、どっちかだったと思うんです、

基本的には。だからしょうがないのかなっていう気持ちはあるにせよ、もっともとなんか選手、クラブに対して。一つの勝ちでも一つの負けでも、何かもっともって考えて行動できれば変わっていくんじゃないのかなと思って。選手とかには負けたり勝ったりしても、自分が何かをしゃべった事によって全員が同じ考えだとは思わないけど、誰かが何かを積極的に伝えていかないとやっぱ変わんないなと。本気で変えようと思って俺はやってたんでこの3年間。誰かが本当に変えようと思ってスタジアム変える人がいないと、一生変わんないなと思ってました。去年昇格できたんですけど、結果的に最終戦であんだけおいしい感じで昇格できたから、まあ黙ってても勝ってりゃ盛り上がるはずなんすね、去年でいうと。じゃあ本当に出来た物なのか、はたまた虚像だったのか、それがわかるのが今年なんじゃないかなと俺の中で思ってた。さっきモンテディオ山形が昇格した年は黒字だったけど後は赤字だったって話を聞いて、確かに去年降格して多分きつかったんだろうなと思うんですけど、そこで客を減らさない努力をスタジアムで。サポーターが声に出して応援する事なのか、はたまたクラブと一緒にピラを配り続ける事なのかかわかんないけど、そうならないための努力をもっともっていかねばならないのかなと。負けたら人が減るのは当然ですからね。それを少しでも道民市民に愛されるクラブになるためにクラブとサポーターと選手が一つの方向に向かってやってかなければ、今年は去年以上の物が作れないのであれば残留は厳しいかなと思ってます。もっともって出来る事あるんじゃないかなと、今年に関しては思ってるんですけど。

司会：ありがとうございます。で、私なんか感じてたのは過去のウルTRASの方に対してどうこうじゃないんですが、基本的にウルTRASはなんていうか熱い応援を繰り返す応援のエキスパートみたいなイメージがあつて。自分にも厳しく選手にも厳しく、ストイックに応援でフラフラになりながらシャウトするというスタイルがやっぱりウルTRASのスタンスで、結構一時期それをゴール裏のサポーター全員に求めようとした時期があったように感じられるんですよ。で、今出たように年齢層が高いですからね、Jリーグ中で一番、うちのサポは。その高いのが悪いっていう部分もあるんでしょうけども、逆に高いからじゃあいつに寄付集めると急に3億集まったりとかね。そういう他のチームではありえないような事もあるんですけども、そこでどうしても一般のゴール裏のサポーターとUSを中心とした極コアな部分のエキスパート集団との間で応援意識の乖離みたいなものがあつた時期が過去に存在したような気がしておりますが、それがここ2、3年ぐらい徐々にUSの方が、まあコンサドーレ年寄りばかりだから我々の理想を押し付けても無理だからって階段を1段2段降りてきてくれた所に、結構我々含め年寄りサポがついていけるなんかがあつたのかなというふうには思ってるんですけど。その辺意識した事なかったんですかね。

安中：応援の仕方について自分はあんまり回りに合わせるってより、なんかみんなの意識が上がってきたのかなっていうのが俺の中では感じましたけどね。スタジアムの応援って、応援の仕方っていろいろあると思うんですけど、飛んだり手拍子したりとか。応援の仕方も何だろうな、昔結構アウェイの応援がいいってよく言われてた時期があつたと思うんですけど、すごいコールが多くてぼんぼん歌が変わって、すげえいいアウェイの応援とかよく話を聞いて。例えばですけど、俺が思ってたのは仮にそういう応援がホームで出来たとして、出来たらはたしてみんなが100%いつも以上になるのか？みたいな。結局俺はそう思えなくて、しかも俺はアウェイのその当時の応援いいとは少なくとも思ってたんですけど。だからそういう人間もやっぱりいるわけじゃないですか、だからそんな中でも。まあなんて言うんですかね、こういうのって言葉にすると難しいですよ、なんだろうな〜う〜ん。

上村：僕が思うのは、そんな歌とかって長い短いあるかもしれないですけど、そんな変わってないと思うんですよ。ただ安中がやった事は、16、5年もサッカーを応援してきて、サポーターならわかっているような事を今ごろ言うのって事も何回も何回も本当に心からみんなにわかってもらおうと思って繰り返す事だと思うん

ですね。僕らだったらもうそれはわかってて来てるでしょっていう事も最初から言ってたと思うんですよ。それで何か感じが変わったんじゃないかなっていう気はしてるんですけど、違いますかね。

安中：ありがとうございます。

司会：今思ったんだけどアウェイの応援、良いか悪いか別にしても、同じ応援をホームでやったら果たしてみんながそれでついてくるかどうかは疑問だねって話があった。確かにアウェイに行くとは一種なんというか孤立感と連帯感みたいなものがある、ここにいるこの800人、600人、1000人、ここにいる奴ら仲間、後はみんな敵みたいな感じの中で応援するんで、俺が声出さないとという一人一人使命感みたいなものがある、テンションがかなり高い所から始まっていきますよね、アウェイの方は。だから極端な話、ハーフタイムになると殆んど声ががらな状態が多いわけですよ。でもじゃあホームでそこまでテンション高く応援に入ってハーフタイムで声出ないぐらいまでの応援してるサポーターいるかという、あれだけ仲間が多いから結局アウェイの八掛けとか七掛け六掛けぐらいのパワーでやってる人の集まりみたくなっちゃてるね。だから今そこを今安中さんは言わんとした部分なのかなと、ふと聞いてて思ったんですけどね。

上村：結局アウェイに来られる方って、もうその時点で応援するっていう意識が高いんですよね。ホームの方がやっぱり日常ですぐ行けるから、ですね。

安中：ちょっと思い出したんですけど、もともと俺が一番嫌だったのがホームはホーム、アウェイはアウェイっていうみたいなものがある。住んでる場所違うからしょうがなかったんですけど、何で同じチームを応援してるのになんかちょっと、何だよホームから来てみたいな、わかります？いわゆるホームはホームのサポーターで、関東は関東みたいな。行ってるこっちからしたら何で同じチーム応援してんのと一緒に頑張って応援できないのよみたいな。すごい最初、ちょっと言い方悪いけど、すごいバカみたいで。だからまずそういう所なくしたいなと思って。ちよろちよろ昔からアウェイは行ってたんすけど、2009、10、11、2008年も出禁になった試合以外と2007年の8月セレッソに勝った試合、ドームだったんですけどそっから行ってない試合って出禁くらいなんですよ。

上村：出禁言うなって。

安中：まあ、それこそ2007、2008なんてまだまだそんなに一つになって戦えていなかったのかなっていう感じはやっぱり受けてて。2009年、そこもまず何とかしないと変わって行かない。結局は関東とかに住んでる人がアウェイも行ってホームに毎試合来るか、ホームに住んでる人がアウェイにも行き続けるか。誰かがそうやって行き続けて発信してかなきゃ変わってかないんじゃないかって思ってて応援しに行ってたんですけど。そうやって試合に行ってるサポーターからも選手からも見られるんで、変わってくるんすよね、やっぱり。こいつがここまで来て言ってんだったら、みたいな感じになった人がもしかしたらいるかも知れないんですけど。別に俺じゃなくても良かったんですよ。只たまたまそういうきっかけがあって、たまたま自分だったっていうだけの話であって。兎に角そうやってホームはホーム、アウェイはアウェイっていうしきたりを無くせた結果、次のステップに行けたかなと。サポーター同士でどうやってやって行こうよとか、ずっと考えていたんですけど中々きっかけが無くて。実際そういうのってひとつに出来たと思えば出来たし、今日ダメだったねって思ったらダメだった訳で、なんて言うか見える形が無い訳じゃないですか、気持ち的な部分の話って。だからやっぱり難しく、あんまりきっかけが無かったんですけど、まあ、ふと。遅かったんですけど去年の函館あたりで、みんなで立ち上がってウィーアーサッポロって呼べたら素敵だよって話をしてたんだよね。ね、後ろのひと

してた訳ですよ。ここでウィーアーサッポロってみんなで立って叫べたらすっげー最高だよ、みたいな。

上村：何で函館だったんですか？

安中：いや特に理由は無いです。札幌では無かったですけど、場所は。だけど函館っていうあの場所で出来たって事は、すごい良かったんじゃないかなと思って。あれをきっかけに。俺の中で元々ゴール裏以外の人ってあんまり見れてなくて、当然同じチームを応援するサポーターなのに。だけどスタジアム全体を巻き込む方法ってやっぱ難しいすよね。みんなわかってるけど、実際方法論って無くないですか？だけど、遂に見つけてしまって。(会場笑い) いやそこで見つけちゃいまして。場所離れてるけど、あの試合前のあの瞬間だけでもああやって同じ事出来るっていうのはすごい事だなあと思って。こういう事普通に出来ちゃうクラブってそんなに、そういうサポーターってそんなに無いんじゃないかなと思って。ああいう事普通に出来て、みんなが賛同してくれて。今迄メインとかバックにいた人達もゴール裏の事見てくれて、少なくとも2008年とかにサポーターは変わんなければと日頃訴え続けてる事っていうのは、みんなに感じ取ってもらえてるんじゃないかなと思って。ほんとに意識が、チームに対して応援に対してスタジアムの事に対して変わっていった結果が、去年の最終戦の形なんじゃないかなと、俺は思っております。

司会：何回も何回も言っても聞かないサポーターに繰り返し言ってもらいたっていうのが、例えば厚別の芝生の上で言ってくれたりね。スタジアムの中で応援が始まる前にトラメガ使ってくれたりしてる事がやっぱり、みんなの心の中に自然と入ってきたんだと思いますよね。さっき上村さんから話があったんですけど今ふと思ったのは、自分もそうですね。アウェイに行く時って当然旅費もかかるし応援するぞ状態で心構え持って行ってきましたけども、ホームの場合には日常の延長みたいな形でふっと応援に入ってしまうんで、我々サポーターの気持ちの持ちようというかスタジアムに入る時点で気持ちを切り替えて、アウェイと同じくらいのテンションを自分でやっぱり。心のフィジカルを整えて試合に臨む位無いといい応援が出来ないのかなと。自分も反省点ですよ、そういうのはね。どっちかって言うとコンサドーレのサポーター、高年齢っていうのが出てますけども、ダメなものはダメとブーイングを選手にかけなきゃいけない時もあるでしょうし、そういう事が中々出来ない。自分の子供の運動会の応援に来てみたい延長があつてねえ。徒競争ビリになったからってブーイングかける親いない訳ですからね。その感覚の延長でどうしても選手を見てしまうサポーターもいらっしゃる。だからみんなをある程度纏めると言うか向く方向、ベクトルを一つに纏めていくっていうのは難しかった。今、何にもしてませんよと言いながら苦労があったなというのが色々と皆さんの方には聞こえて来てると思うんですけども。上村さんから見てどうですか、安中さんは。

上村：何ですか？

司会：え？どういう感じですか？今迄のUSのコールリーダーの中で、何が極端に違いますか？

上村：えーと、あんまり人の意見は聞かないですよ。(会場笑い)

司会：聞かないんだ。

上村：はい。自分が思った事しか信じないですよ。

司会：独裁者？

上村：割とそうですね。（会場笑い）昔を知ってる方もいらっしゃると思うんですけど、結構昔酷かったんですよこの人。（会場笑い）高校生の頃とか。（会場笑い）盛り上げる為なんですけど応援をしてない人の所に行って、シメあげるじゃないけど、何でしないんだみたいな言葉で言いに行ったりとか。そんな事しなくてもいいじゃないですか。（会場笑い）でもそれが応援を盛り上げる為だと思ってやっていた頃もあって。そういう部分はちょっと方向は変わったんだけど、精神は変わってないなって僕は思うんですよ。コンサドーレの為に何をすべきかっていう事を考えて、只ひたすらにそれをやるっていう部分は変わってないと思うんで、そういう所にみなさん、こいつの事だったら言う事聞いてみようかなっていう風に思われてるんじゃないかなと僕は思ってるんですけど。

司会：そうなんですか。（会場笑い）良かったな、昔シメあげられなくて。でもそうなんですよ、熱血漢溢れれば真剣に応援してないヤツは生温く見えちゃうんですよ、やっぱり。でも生温くしか応援出来ない年配のサポもいるっていう事も分かって頂く時期が来て、そこである程度歩み寄って頂けて。それに対して周りの高齢者サポーターも同調出来る環境が出来あがって来たんだと思いますけどね。

上村：あと既成概念に捕らわれない。去年の後半ぐらいから厚別の試合で上の方のかたもみんなで立ち上がりましょうみたいな話、いってると思うんですけど、俺からすればそんな事出来る訳ないでしょうって思う訳ですよ。あそこの上の方は座って応援される方がいる場所だっていう風に思っているから、座ってても別に応援してないと思わないし、それはそれでいいと思うんだけど、選手から見たら当然ゴール裏は全員立って応援してる方が力にはなる訳ですよ。でもそんな事今更、15年も経って変えられないでしょと思うんだけど、こいつはそうは思わないんですよ。言ってけば変えられるんじゃないかと思ってる訳ですよ。そこら辺がやっぱりすごいなと思いますけど。

司会：だって。

安中：いや厚別は上段のみんなが座るエリアがって話なんすけど、普通Ｊリーグのスタジアムを見てゴール裏考えてもらうと、座ってる人と立ってるが分かれてるゴール裏って、あります？

上村：いや無くはないっしょ。

安中：いや無くはないですけど、そんなに無いと思うんですよ。結局そう持ってきたのはアウェイの観賞エリアが広すぎて。2008年にドームでマリノスに負けた時って、あーＪ１だなーって思いませんでした？あの感じ。勝ってパラソルぐるぐる回して。あん時に、あーこれがＪ１かーみたいな。結局厚別の現状立って応援してるエリアのブロックと、あの厚別でパンパンに埋まったアウェイサポーターがいるエリアと、人数で言ったらそんなに変わんねえんじゃないかなと思って。だったらちょっと厳しいかなと。この先ももっともいいスタジアム、最高のスタジアム作るんだったら、そういうとこ変えないとキツイんじゃないかなと思って。すぐに変わる事は厳しいとは思いますが、厚別のゴール裏全部が、みんなが立って90分間応援出来たらすごくないですか？忘れてたんですけど、聞きたいです。どうなんすかね？

司会：でも2000年とか厚別のゴール裏みんな立ってた時期って無かったです？熱血サポエリアが出来た頃ですか？

安中：熱烈サポーターゾーンってまだあるんですか？

司会：今でもあるんですね？

安中：それがゴール裏全部になれば、単純にただ全部そこをゴール裏にすればいいんじゃないかっていうだけの話だと、俺はすごい結構簡単な感じで思ってるんですけど。実際、無理なんすかね。どうなんすか？

司会：誰に聞いてんでしょ。HFCさんどうぞ。

渡部専任部長（以下渡部）：出番が来たので。（会場笑い）ワタナベと申します。宜しくお願いします。実は安中君とはあの仙台で、急に飛び降りて来まして（会場笑い）。私が運営担当でチーム着いて、仙台のスタッフから、私たちが二人ぐらい確保したんですがどうします？って話になって。（会場笑い）わかりました、部屋用意してって言って。確か本人覚えてないと思うんですけど、後ろから首掴んで、はい行くよーって言って入ってちょっと説教した覚えが。彼まだ高校生だったと思うんですけど、私も2007年室蘭のセレッソ戦を機に、4月1日からJリーグに出向する事になりまして、2007、8、9と行ってました。で、皆さんの動きをユーチューブだとか色んな所で。リーグにいと札幌を応援する事が許されないの、黙ってずーっと見守ってました。J1、J2で優勝時もピッチには優勝対応でいたんですけども、2008年になりまして様々なトラブル等もあって、その対応に追われて札幌の事はすっかり忘れていました。そんな中安中君とまた2010年から。ここにいる上村君もそうなんですけども皆様と共に2010年から、何をすればいいのかなーと思って戻って参りまして。皆様には言えないんですけど、帰って来た時に彼らと食事をした機会があります。今何を考えていて何が変わっていて、お客さんの年齢層がどう変わってきたのかっていう事を把握したかったからです。一つ一つの動きを追っていきました。安中君もそうですし、日々色んな所で会う方がいらっしゃいます。2008年開幕がアウェイで、最初鹿島ですよ？実はあのスタジアムにいました。ゼロックススーパーカップで10、20人位、国立競技場で飛び出た処理をしまして、皆様が楽しんでる間に、私は30人位に胸ぐらをつかまれて（会場笑い）、何とか入場禁止にしたいという話をしていた。まあ帰って来たんですけども北海道って何なんだろう、札幌ってどんなスタイルっていう事をずっと追って来ました。ちょっとお話、少し頂ければと思うんですけども、2007年にドイツのブンデスリーガ2部でマインツっていうクラブに行きました。皆さん覚えている方いらっしゃいますか？2002年バーヤックっていう左利きの選手がいたと思うんですけども、彼がマインツでかなりの活躍を見せ、その後クラブの中で得点王になってます。その会長と話した時に、実は私札幌なんですと。「あーバーヤックは札幌から来たんだよ。大活躍だったんだ。札幌って、あの市民クラブかい？」と言われました。そうなんですと。「実はマインツも2万人位収容の仮設スタジアム。無理矢理ブンデスリーガ1部に上がった。苦労は同じだ」と。「うちは市民クラブだから、普通の企業スポンサーがいて盛り上がる様なクラブじゃない。市民一人一人がこのスタジアムにどれだけ集まって、このチームを支えていくか」。監督が10年変わってないんです。普通考えられないんですけど、それをみんなが応援して、どんな負けようが勝とうが苦しもうがもがこうが、みんなで動いたクラブだって事が実際分かりました。その時に会長が「サポーターの気持ちを汲み取りなさい」っていう風に僕に言われました。で、その会長何をしたかと言うと、スタジアムの外にサポーターズゾーンっていうすごい仮設立た。4階建ての建物があって、そこに試合前に年齢別にお話が出来るルームがあって、例えば先程飛び降りたって話があったんですけど、安中君みたいな感じの子は年齢上の方が教育係。（会場笑い）これからのマインツの若い世代を育てていく為の教育ルームみたいなのがあって、そこでお前など。向こうは薬とかも発生するので、お前薬やるなよとか、上から助言をしながらスタジアムにみんな入ると。その一体となった応援がドーンって始まるというクラブです。私が戻った時に彼らとお話したのは、実際何をやりたいんだと。最終戦で赤黒の縦縞にしようとか。安中君と

か上村君とか、急に選手のメッセージを、仲間を信じてっていう物を作りたいと。彼らの言う事自体はたぶん殆ど9割、10割位は色んな話をして受け止めてきたつもりなんです。やれない事ははっきり言うんで、彼らには。話が長々となりましたけど、なんで上段が立てないんだっていう悩みを抱えているクラブが、僕全部回ったんですけど、まだまだあります。実は去年うちが3位になるか4位になるかで困った徳島が、今同じ状況に立たされました。上の人が座ってしまっていて、見えない。なんでお前ら立つんだと。サポーターからすれば、一所懸命応援してるから立って応援するでしょっていうのが、当たり前だったんですね。その最終戦は徳島さん、アウェイだったんですけど、その前のホームの時に実はそういう状況が生まれていて。あの昨日セキュリティ会議が全クラブ集まってあったんですけども、徳島の人と話しをしていて。ごめんなさい、社長にはまだ相談してないんですけど、この間CVSさんのミーティングがあって、また25日にあるんですけども、僕としてはもう。一応運営任されてる人間ですから、もうそのまま上段の上まで解放してしまえと今。実際問題見える見えないっていうのはお客様の都合と言うか、僕もその熱烈サポーターゾーン自体の表れが見えないところからたぶん始まっていると思うんで、それをどういう風に解決したらいいのかと。ただそういう事をクラブがしっかりと皆様に発する事により、ここは一体となって立って応援する場所なんだという風に理解が出来れば、特に問題は無いかなと。もう一つ考えなきゃいけないのは、J1というステージです。今アウェイゾーンが、例えば厚別だと一部分に限られた所にあります。これが例えば、浦和はドームですけどアウェイが売り券でゴール裏を全部埋めた場合に、B自由席の売り券が減ります。そうするとB自由の新規のお客様がホームのゴール裏B自由にいると言う事が発生する事があるんですけども、先程言った通りクラブがきちんと発信する事により、あ、そうなんだと、それだったら私SB買おうかなと。ごめんなさい、高いチケットをどんどん売りたいっていうのがあるので(会場笑い)、そこを誘導してSA、SBないしはSSそしてSと。

司会：本音が出ちゃってる。

渡部：本音が出ちゃってるんですけども、そういうところで売ると。で、さっき山形さんの話がみなさんから出たんですけども、札幌が持つて武器ってのはちょっと違うと思ってます。二つのスタジアムがあって、一つは4万人キャパです。もう一つは2万人キャパです。山形には絶対出来ません。僕、ファジアーノ岡山っていうJ2のクラブと一緒に立ち上げたんですけど、入会する時に岡山の人が言っていました。札幌はあれだけ大きい箱があるから、入れれば入れるだけ、まだ未知数だねと。これフロンターレにも言われました。今一生懸命改修、新しいスタジアムを作りたいと言ってますけど、4万人入る僕たちは武器を持っています。今年はリーグ戦で10試合やります。これだけ入る箱があるのに、入らないのはもったいないと。これはクラブの努力だと思うんですね。そこで皆様をお願いしたいのは、色んな発信の方法があって、試合が勝っても負けても応援して頂きたい。今年残留というところで言うと、来年がもっともっと勝負になってくると思うんですね。クラブでも社長以下ほぼ毎日と言っていい程色んなプロジェクトミーティングがあって、今度はアジアマーケットに向けたミーティングも始めるんですけど、そういう中でチケットミーティングが一番多いです。例えばシーズンシート、単券に関してもそうです。僕も社長もみんなノルマを課されてるので、シーズンシートの販売が終われば今度単券の方に進んでいきます。それで成功したのが新潟だと思ってます。そのチケットでさっき三上が話しましたが、ひょんな繋がり僕三上大学同期なんですけど、彼が色々僕にも言いますし社長にも。選手に中々お金が使えない。社長には言えないんですけど僕の所に、何とかせいやーみたいな。(会場笑い)ちくちく言ってきたりします。確かに興行収入上げるしかないねと。その為には何をしたらいいか。話戻るんですけど一生懸命みんなが応援する事が大前提なんです。一生懸命応援したら、やべっちFC出ます。(会場笑い)そうですね。ゴール裏がらで10人の所へ誰がTV追っかけるかって事なんです。一生懸命やれば絶対にTVは付いて来るんです。で、TVが付いて来るって事は、今度、新聞記者の方帰られましたけど記事になるんです、悪い事しなければ。どっちかなんです。良いで出るか、僕が処理した浦和・ガンバみた

いな、2008年5、17に起きたトラブル、警視庁行って処理しましたが、どっちかなんです。良い事やってれば出ます。悪い事やっても出るんです。だったら札幌は良い事やって出ましようっていうのがクラブのスタンス、これから持てこうと思っています。僕は安中君の意見というか、皆さんが逆に同意するんであればゴール裏を上まで解放します。たぶん今日この意見が安中君から絶対出る。僕の頭には昨日JALの飛行機を乗りながら考えていて、本当は今日会議あったんですけどキャンセルしてこっち戻って来たので。僕はこの間のCVSさんのミーティング含めて、そうして行こうという風に今思ってます。色んな所で1個1個組み立てて行かなくてはいけなくて、僕の中では皆さんの行動一つが1個のパズルになっていて、札幌ドームという一つの画面があったらそこにボランティアさんがいたり、サポーターの皆さんがいたり、社長がいたり、選手がいたり、時に岡山がいたり。(会場笑い) 皆さまが共有今日出来れば、僕は本当に今日。安中ここに来たっていう事自体が齋藤さんのおかげだと思うんですけど、本当良い機会だと思ってるので、是非解放します。(会場笑い)

司会：今おっしゃってるのは、ゴール裏の両脇も座ってる部分ありますよね。そこも立たせて上も全部、ゴール裏は完全に立たせるって事ですか？

渡部：今2段階で考えていて、まずは安中君が応援してる所から、今熱烈サポーターのなかからズバって上に切ろうと思ってます。一番クレームが来るのが、そのラインの一番上の方々なんです、実は。まずそこを第一段階で今年やってみて、来年度に向けて全部解放するかを考えようかなと、想定してます。

司会：と言う事で、安中君から提案が出て、HFCさんも乗っかかりちゃった。ですからゴール裏の両サイドで座ってる所は取り敢えず容認して、ある程度中心部の所、ずどんと上まで全員立つゾーンにしてはどうですか？というのをこの場で皆さんが拍手で賛成と言え、HFCさんも賛成で。(会場拍手) じゃ、それでお願い致します。

渡部：ありがとうございます。えー。

安中：これ、両脇もいっちゃった方がいいんじゃないすかね。(会場笑い)

渡部：ちょっと待って。

司会：2段階、2段階。焦るな、焦るな。

上村：2段階計画で。

矢萩：この話が前からある事は当然私も認識してますし、サポーターの皆さんともその事についてお話しした事もあるんですけども、今年どうするかについては今急にこういう話出ちゃったんで私もびっくりしてるんですが、前からそういう構想があるというのは聞いてました。只私自身はまさしく社長になる前、96年のゴール裏が芝だった時代からゴール裏で見てた人間なんですけれども、確実にあの一番後ろの方で座って見たいタイプの人間でございましたんで(会場笑い)、これを急にシーズンシート買ったにも関わらず勝手にHFCが100%厚別のゴール裏はスタンドにすると。私がシーズンシート、当時の様子に買ってる立場であれば相当なクレームを付けるという風に私自身思ってます。HFCの中で方向が定まってるのか混乱してるのかそう思われるかもしれませんが、基本的にはやっぱりサポーターの皆さんが決めて行くという事だと思

ますけれども、今年は既にシーズンシート販売して、去年と同じ様な感じで買ってるB自由席の人も沢山既にいらっしゃるという事も考えれば現実的にはちょっと厳しいのかなと。私の個人的な考え方もありますので、そんなに時間かけないでHFCの考え方をきちっと整理した上で発表したいと思いますんで。HFCの中でもそういう考えの方が。私みたいな人間もいるし既にB自由席ゴール裏でいつも見ている方の中にも、今拍手は沢山いましたけれども躊躇いがあった人も必ずいると思いますので、もう少し整理した上で情報は出していきたいと思います。今日いきなり100%スタンドにするという風にはちょっといかないのかなと。だとするとシーズン前に、今年からそういう席にするという事をきちっとやった上でチケット売の手続きは少なくとも必要のかなと私は思ってますんで、もう少し社内調整させて下さい。でも自由な論議は、こういう感じでやっていくってのは非常に良い事だと思いますんで。結果それが全部スタンディングになった場合にはそれはそれで仕方ない、というよりはそれはそれでクラブの方針として自信をもって打ち出していきたいと思いますんで、そういう声もあるという事だけ取り敢えず。渡部君の熱い思いは今、十分聞きましたんで、きちっとこれから調整していきたいと思います。すいません、横から話しちゃって。(会場拍手)

安中：さっき話があったんですけど、札幌と比べてとか。何でJ1昇格したチームと徳島が同じレベルなのよっていう、そもそもなんすけど。札幌ってJ2行ってJ1行って。応援も含めてやっぱ世界を目指したいんす、俺は。世界に行くからどうだって事でもあるんすけど、それはクラブもサポーターも選手も一つになって戦って勝っていった結果が世界だっていうのが大前提ですけど、今の話だと言っても徳島すからね。

上村：別に、意味がわかんないんだけど。

安中：や、だからさー。

司会：そこを強調すると徳島のサポからクレームくるから。

安中：あ、はい。

上村：あれでしょ。最後の方でJ1昇格かかっている試合にも関わらず、全然盛り上がったような無かったような徳島とは比べないで欲しいって事でしょ。

安中：いや、そういう事です。現状そういうクラブと同じ問題を抱えてる事自体、俺としては結構微妙なんすよ。

司会：ああ確かに。

安中：札幌が目指す所って、もう一回言いますけど、やっぱり世界を目指したい。このお金の無いチームだからこそ、目指せるものがあると思ってるんで。スタジアムの雰囲気も世界に通用するスタジアムにならなければいけないのかなと。確かに急に、社長が言ったように、それはたぶんそうなんだろうなと思うんすけど。

上村：素朴な疑問として聞いて欲しいんすけど、僕等からすると別にあそこじゃなくてもいいんじゃないですかっという思いがあるんです、多少ね。アウェイのゴール裏で座って見られてもいいんじゃないですかっというのがあるんです。僕等の勝手な意見ですよ。

矢萩：ああ、はい。

上村：単純に、何でだろうっていう思いはあるんですよ。

矢萩：96年にチームが出来て始まった時から見て人間にしてみれば、ゴール裏がどういう形で形成されて、スタンディングなのかどうかっていう事も含めて分からないままに16年間ゴール裏に生息してる人間だって現状いる訳ですから、私みたいな人間が。(会場笑い) それはそれで僕は何百人単位でまだいると思いますよ。まだJリーグ出来てから20年に満たない中でコンサドーレも17年目のシーズンなんですけど、その中でまだコンサドーレのゴール裏文化はそこまで出来きっていないのかなという風に私は率直に思っていて、何故ゴール裏に行くかっていうのは座ってでもゴール裏で見る事が一番楽しいからですよ。自分の定位置だと思ってますから。そういう人がまだまだ確実に数百人単位でいてゴール裏の2割3割占めてるとすれば、それでチケットを買って、うちが勝手にそういう声を見做してその人達を排除する様な形になっちゃったとしたら、逆にその人達がスタジアムを離れる事にひょっとしたら繋がるかもしれないという所は我々としては意識しとかなきゃなんない。もう少し細かくその辺の声は吸い上げていく必要があるのかなと、元ゴール裏の緩い住人としては思ってるという事でございます。

司会：社長の言う事は私は良く理解出来ますし、もう年パスなんかは売れてる訳ですから。暗黙の了解として座っててもいいよという了解も付加されていると思うんで。その条件で買ってる方もいらっしゃるんで、今更所謂チケットを販売した後に条件を変更するというのは如何なものかなという事だと思いますね。只声としては、来年か再来年かその次にでも理想的にはゴール裏みんな立てるような雰囲気にして頂ければいいかなと。その為のワンステップとして今年例えば中央部だけでも上までオールスタンディングにするとかという試みも御検討を頂きたいという事で、サポーターズ集会での要望として出していくという事では如何でしょうか？(会場拍手あり) 宜しくお願い致します。

安中：あ、それに付け足して。オフィシャルで今年は変えれませんよとなった場合なんですけど、当然引き下がる訳も無く。(会場笑い) 俺個人としては、そうなった場合たぶん声をかけ続ける、独断で。そうなった場合に、恐らくCVS？

上村：CVS。

安中：CVSってボランティア？

上村：ボランティアですね。

安中：自分達で声をかけて立って下さいみたいな感じでお願いをした場合、例えば立ってくれた人がいたとしてですけど、たぶんボランティアの人だと、ここは座って下さいよと言う可能性もあると思うんですよ。そこは出来ればして欲しくないなという事なんですけど。

司会：あその上のエリアは座って見なければいけない席なんですかね？

矢萩：基本的に熱烈サポーター席が出来た経緯は、座ってる人と立ってる人が混在する事で座ってる人が前に立ってる人がいると見えないう事で分けて。しかも尚且つ後ろの2列ぐらいを座らせないような誘導をこな

がら、座ってても視覚的には見えるようなセッティングを今も継続してるって事だと思います。だから座ってなきゃいけないという事よりは、やはりどこの席にいてもきちっと試合を見れる様な環境を我々は用意しなきゃならないという事で、今の様なセッティングになってるという事です。例えばさっきの案に出た様に真ん中の何割か、7割でもいいですけどズドンと上まで立たせた場合、その横に座ってた人から見た場合どう死角が発生して、そこで座ってる人がきちっと試合を観戦できる環境にあるかどうかというのはこちらとしてはきちっとチェックした上想定して、それで決め事を作っていくと現場で混乱するだけなので。今安中さんがおっしゃった立って応援して下さいよという呼び掛けをして、それに呼応して立つ人があるという事自体は去年までもやってる訳ですから、それを否定してる訳じゃないです。けれどもCVSの人も巻き込んでそういう風な形になっちゃうと、まずその前にHFC側として死角の問題をクリアする様なきちっとした決め事を作って徹底していくって必要がありますから。我々としては、折角みんな応援する中で部分的でも立ってる人と座ってる人の中に不快感与えるような小さいトラブルがあるっていう事は、出来るだけ避けたいというのが基本です。それを避けながら次に進む為には今の発想が。具体的に現場図面で落とした場合、どういう形で可能かどうかについてももう少しきちっとチェックしてかなきゃ現実的には難しいのかなと思います。今日そういう声も出ましたし、前からあるっていう事は私も認識してますので。只CVSの方が個別の判断でとか、もしくはゴール裏の安中さんに言われたからっていう事でCVSの人ですら判断に迷う様な状況は我々としては作れませんから。決め事は決め事できちっと、もう少し整理していきたいと思ってます。

安中：よろしくお願いします。

司会：って言う事は、安中君は後ろのサポーターも立って応援しようよっていう呼び掛けはしていいって事だよ。

安中：まあ、しますけど。(会場笑い)

司会：うん、うん。別にそれはダメだって言ってる訳じゃないんだから。

安中：まあ、まあ、一応昇格。

上村：そうだよ。

矢萩：まあ只そういう座って見られてる方だと分かると思うんですけど、例えば立って応援しようよって呼び掛けられて立つ人と、それでも座る人は混在すると思うんです。そうすると至る所で。5列目の人が立って7列目の人が絶対俺は座って見たいって人が混在する状況だとすると、どこまでトラブル無しに済むかっていう事については結構微妙だとは思いますがね。呼び掛ける事自体は否定しないけれども、混在する事が分かってるにも関わらず、これがクラブとしての決め事ですっていう形の発表の仕方は現実的には中々難しいのかなと思いますので、その辺も踏まえて、どういう風な席の設定の仕方とアナウンス、決め事が必要かはもう少し。厚別が始まるまで整理の時間を頂きたい。出来ればシーズン前にはきちっと整理して発表したいとは思っています。

安中：一応昇格して。

矢萩：はい。

安中：J 2 であれだけの最終戦、雰囲気出来て次、J 1 の舞台なんで。スタジアムとしても次のステップには進まなきゃ絶対にいけないと思ってるんで、どうか御検討下さい。

矢萩：あの一。

上村：只、あれですよ。熱烈サポーターゾーン出来た時に。

矢萩：はい。

上村：このゾーンは増減する可能性がありますっていう事はありますよね。

矢萩：もちろんそれは自然発生的に、特に横の部分はいつてるんじゃないですか？いやいやだから現実によ、中心の通路から下の部分、両脇座ってる人もいるし、若干のトラブルではないんですけど曖昧な所は今ありながらまだ進んでる様な気はするですよ。それを又セッティング変える場合にはきちっとこちらが決め事をした上でアナウンスしないと。物事を変えると必ずトラブルは起きる可能性があるんで中々。物事をスムーズに変えるってのは難しいのは重々承知の上でも、折角来たお客さんが不快感を覚えない様なやり方が何処にあるかっていうのは厳密に考えていく必要があると。只基本的な方向として今お話が出ている方向、目指したいという気持ちは十分理解してますので、それが今年どこまで出来るかという事についてはもっとお時間を頂きたいという事だと思うんですけど。

司会：いいですか？

渡部：私の熱いトークでこういう風になってしまったんですけど、(会場笑い) 私が戻った時に、ごめんなさい、熱烈サポーターゾーン自体が分かんなかったんですよ。新しくお客さんが入って来た時に熱烈サポーターゾーンの告知が全部遅れていて、実際新規で来たお客様が熱烈サポーターゾーンって何よみたいな、そういう空気が隣に座られてる方とか、いたと思うんですよ。僕は運営を受け持ってるので、やり方としてはトータルの皆様のこの意見とか色々どんどん聞いてるんですけど、どっかでラインを引かなきゃいけないのは確かなので。社長と今ここでバチバチやっちゃいましたけど(会場笑い) 私はこのバトルがいいと思っていて、敢えて今日、安中くんと前から前から受けていたのでこのテーブルに乗っけたんですよ。三上強化部長が先程キリノ選手の移籍の話をした。テーブルに乗っけるという風な話だと思うんですよ。僕はその論法と同じで、今日ここに集まった皆様と、これから議事録になっていくと思うんですけども、こういう事が札幌の中でテーブルに上がってきたんだと。変える事って一年先かもしれないし五年先かもしれないし今年からかもしれないんですけど、こんな事が今日このテーブルに上がった事自体が僕はすごいいいと。今後も皆様とまたUSの方とか齋藤さんも含めてですけど話をして行って、こういう事を一つ一つ決めていくと。

最終戦の時にボランティアさんの前で。この中にもボランティアさん何名かいると思うんですけど、たぶん安中君とか同じで、僕は運営として札幌のスタイルをずーっと作りたい。思いだけで今やってます。例えば浦和に行ったら、あーこんな感じね。浦和って独特だよ。例えば日立、レイソル行ったら、あーバカー代ねと。

(会場笑い) じゃあ札幌って何なんだろうって思った時。先程マインツの話しましたがボランティアさんも一杯いるんです。警備員の方もいます。ゴール入った瞬間に全員立ち上がってます。それぐらい札幌のスタイルがみんな応援している様な、今後出て来るであろう事柄をどんどんみんなテーブルに乗っけて。社長いる前で変な話しますがクラブがさぼっていたと思います。私が戻って来て修正するのにかなりの時間を要しまして、僕は今年が勝負の年だと思っています。ほんとに色んな事を修正して来ました。帰ってきたら社員が

みんな変わってました。ここにいますけども林さんに色々相談乗ってもらったりしましたけど、ほんとにクラブの中が変わってしまった。何とか皆さんで。社長、先程コメント出ましたけども、こういう事柄も一つ一つ噛み砕いていって細かく分析をして、皆様に発信出来ればと思いますんで、宜しくお願いしたいと思います。安中君は、大学の後輩になりますから。(会場笑い)

安中：ありがとうございます。

上村：そこもつながり？

司会：札大？俺の後輩じゃ？

安中：あ、マジっすか？

司会：札大？

安中：はい。

司会：札大？

安中：はい。

上村：札大関。

司会：札大関ですね。(会場笑い)

上村：コンサドーレってそうだったんだ。

司会：えーと、冗談はさておき、安中君に折角なんで。スタジアムでは一いって手上げて質問出来るタイミングは無いと思うんで。ここでちょっと聞いてみたいとか、こんな風な事をしてみたらどうだべっていうのがあったら言いたい方、手上げて下さい。怖くて、言えないっていう事は無いと思うんですけど。はい。

挙手者：いいですか？

司会：Cさんどうぞ。

挙手者：札幌近郊から来ました中川と言います。

司会：近郊じゃねーし。

挙手者：去年のサポ集で司会の齋藤さんが今年の札幌は昇格すると。鹿島が天皇杯で優勝した年は、札幌は100%の確率で昇格するんだと。だから今年は絶対昇格するんだって仰ってたのを鮮烈に覚えてまして。その後リーグが始まって見れば室蘭では例えばシュート2本しか打てないで、ある意味惨敗に近い様な負け方して

ましたよね、あの時期。で、あの試合を見た者としては昇格なんてとてもとても口に出して言えるような状況じゃ無い様な。それが最終的には昇格という事で、華々しい結果になったんですけれども。今でもよく解らないんですけど何がどうなって昇格したのか。(会場笑い) ゴール裏で見続けていて何かきっかけとかなんかそういうものってありましたか。(会場笑い)

安中：これはチームの成績と関係無いんですけど、あの苦しい時期はたぶん選手が一番きつかったでしょうからね。あれを乗り越えたっていうのはすごいですよね、やっぱり。たぶん監督含めて選手の頑張りだと思うんですけど。選手とサポーターの間って、結構微妙じゃないですか。今迄、2008の降格なんて最悪でしたよね。覚えてます？いつもどおり、はいどうもありがとうございました、みたいな。あの感じが俺すっげー嫌で、だったら別にゴール裏に挨拶しなくてもいいと思ってて。選手とサポーターの関係はやっぱり常に同じ所を見てたいと思って、練習場とか行きまくって色んな話したりとかアウェイ行っても試合終わったらバスの所待ってて。古田に去年だったら、今年乗ってねーよなー、おまえ、みたいな話とかしたり、そっすねーとか言われたりとか。(会場笑い) それはいいんですけど、明らかにちょっと変わってきたなという時があって。去年一週間アウェイ3試合連続だった時、京都鳥取徳島。俺暇なんで一週間いたんですけど(会場笑い)、徳島で勝てたんすよね。連敗してましたよね確か、鳥栖にも負けて。あん時鳥栖に負けてそのままアウェイ行ったんすよね。練習も向こうでキャンプしてたんで行った時に、選手が普通に、わざわざ来てくれてありがとうございますと練習終わったら言いに来てくれたりとか、サポーターの為に戦ってるんじゃないかなーっていう時があって。徳島で、あの時確かサブ、曳地が入ってたんですけど、自分が試合に出ないのにサポーターの席に向かって、今日の試合は一緒に戦っていきましょうみたいな感じで、言って来てくれたり。試合に出てない選手がああやって言って来てくれるっていう事自体、すごい事じゃないですか。コンサドーレって苦しいシーズンが多いと思うんですけど、実際はそれでもずっと応援してくれてる人の気持ちが徐々に伝わってるんじゃないのかなと思う3試合だったんですよ、個人的には。それはやっぱりみんながどんな結果でも足を運んで必死に声出してっていう事の形だと思うんで。どんなに苦しくても最後まで応援するっていう所は札幌の、他には誰も真似出来ないチームの色だと思うんで。そういうの続けてたらもっともっと選手は応えてくれるんじゃないのかなと。それがちょっとでも力になればいいと思うのがサポーターだと思うんで。少しでも、例えば去年で言うと室蘭とかああいう試合もあったけど、そういう中でも感じ取ってくれてる選手は少なからずいると。そういうのが伝わればいいですよなっていう話だと思うんですけどね。

挙手者：はい、ありがとうございます。

司会：いいですか？

挙手者：はい、ありがとうございます。

司会：はい。逆を言えば選手に対して、あのプレーなんだよとか、もっとギリギリまでボールを追いかけてよとかって気持ちがあっても、悪い所ガアガア指摘する前に、良い所を褒めて育てるっていうスタンスもサポには必要なかねえ。どう思います？選手だって挨拶来た時、あそこ悪かったここ悪かったって言われたら面白くないよね、やっぱりね。

安中：まあ、俺あんまサッカー詳しくないんで。

司会：なあに。

安中：いやいやほんとにあんまりサッカーのスタイルとか、三浦さんがどうだとか石崎さんがどうだとか、俺あんまサッカー詳しくないんで、あんまり試合見れてないんで。(会場笑い)

司会：ああ、確かにね。

安中：よくわかんないのもあるんですけど、プレーの事とか俺はどうでもいいっちゃあどうでもいい。まあ気持ちの面で。俺すごい黄川田とか堀井岳也とかが好きで、最後までボール追いかける姿勢とか。

司会：ああ。

安中：ああいうのに胸を熱くさせられるんじゃないのかなと思ってんですけど。

司会：そうだよー。黄川田賢司くんは利き足が頭だったからねー。(会場笑い) サポーターの中にはやっぱりそういう。兎に角選手を信じて最後まで応援をしてくというスタンスが必要かなってというのは私も感じましたし、ゴール裏で応援してて特に思うのは、昔から見て応援するサポーターの肘の位置が高くなった事は感じてますね。前はこう胸の前でやってたのが、今はきちっと肘が高い位置でこう。手をはたいてるっていうのは特にここ2、3年ぐらい感じられるんで、だんだん札幌のサポーターも意識高くなってきて、みんなやってるなみたいな感じは。横で見るとサポーターのちょうど肘の高さが揃ってるんで中々かっこいいなとは思って見てますけどね。あと何か質問ありますか？はい。

挙手者：この席にいて何も発信しないのはちょっと寂しいので一つ聞いてみたいんですけども、函館からって言ってましたけど、バックスタンドとかメインスタンドとかに来られて、皆で立ちましょ、応援しましょっていう風に言いまわって、その所ですごく機動力のあるリーダーだなと思って見てたんですよ。あちこちの試合に行っても必ずいるし、何処に行っても熱い声を出して応援している姿にすごく感銘を受けるんですけども、こんな事聞いちゃうと失礼になるのか、あるいは神秘的な部分がなくなるのかよく分かんないんですけども、普段の生活がね(会場笑い)、どうなのかなって所がすごく気になるんですよ。たぶんオフの期間は次のシーズンどうしようかって頭悩ませてると思うんですけども、普段一週間ごとに試合がある時ってずーっと緊張してるのか、あるいは自分としてはこの時間は休んでる、オフだよってのは。その辺のモチベーションの持ち方はすごく気になってるんですけども、ちょっとお話頂ければと。

安中：俺の私生活なんか知りたくないっすよね、普通ね。(会場笑い) モチベーションかあ、何だろ？モチベーションなんてみんな同じですよ。チームが好きだから応援するっていうだけの話であってね。

挙手者：熱さが違う。

安中：まあ、応援に関しては、例えば今日ここにきたみんなの誰よりも自分が一番熱いと思って常に応援してるんで。

司会：ああ。

安中：そこだけは変わらないかなと思っております。スタジアムではこうやって話したりとかなかなか。みんな

な色んな事考えてると思うんで、コンサドーレに対してとか応援に対して。スタジアムの中だと例えば、何でお前こんな事言うの？って、俺もたぶんもし何か言われたら思っちゃうと思うんですよね。だからこういうスタジアムと離れてる場所で話す事って無いんで、なんか意見があったら、俺はこう考えてるよとか。そういうのって意外に参考になるっていうか。今迄自分の考えでしか発信出来てないけど、第三者の意見っていうのはすごい参考になるっていうか、そういうの Pakった事もあるんで（会場笑い）、どうか一つでも二つでもお願いします。

司会：どんどん言って上げて下さい。（挙手者あり）はい。

挙手者：陰ながらコンサドーレ応援している高谷です。（会場笑い）先程話にもありましたけど、函館でみんなに立って欲しいっていう声をかけたってのは非常に評価してまして。僕は96年からアウェイずっと2000年位まで殆ど行ってたんですけど、その当時アウェイ、関東は関東の応援があって、札幌は札幌の応援があったっていう時代だったんです。あの頃のアウェイの人達が何をしていたかって言うと、もともとアウェイに来る人たちが少なかったんで、例えば単身赴任をしていたりとか、北海道を離れてずっと東京で暮らしている人達とか、お嫁に行ったとか。そういう人達が北海道とか札幌とかっていう名前を聞くと、そこへ集まりたくなる。熱い応援を思ってくる訳じゃなくて懐かしさとか、そういった北海道を味わいたくてスタジアムに集まる人達がいて、そして私達の様にある程度一所懸命応援したいって人達もいて。で、少数の中でどうやって応援してくのかって考えてた時に、熱く応援する人達だけではなくてその周りに来てる北海道を懐かしがって来てる人達も含めて大きな応援をしたいと言う事で、コールリーダーはその周りの人達には是非この真ん中に集まって応援して欲しいって事をずっと呼び掛けて、やってたんですよ。僕がそのアウェイの応援が良いな一っと思ってたのは、熱い連中がそういった人達にも声を掛けて一つの大きな応援をしていたっていうところが非常に魅力的だったんだと思うんです。今回函館からだったと思うんですけど、そうやって他のサポーターにも是非僕達と同じスタンスで応援して欲しいって事を言って歩いたっていうのが非常に良かったんだと思います。それが周りの人達に非常に受け入れられたんだと。僕も函館行ってあの時にああいう風に声を掛けられて、非常に立ち上がりやすい環境を作ってくれたな一と思ってました。その後ドームでもずっと歩き回って、一所懸命みんなに声掛けて、試合の最初の時だけでも声を、みんなで立ってウィアーサッポロコールをやって欲しいっていう風に言ってたのが非常に良かったな一と。熱烈サポーターゾーンの話とかもありましたけども、試合が始まる前ああいった応援に対して立ち上がって欲しいって事はクラブもどこも止める事は無いと思うし、むしろそうやってみんなで一体感を出して貰うって事に対しては、クラブはきっと喜んでくれてるんだと思っています。という事なので、僕としてはこの後も是非スタンド全体に、試合前だけでもいいからまずは立ち上がって一緒に応援しましょって事を言って歩いてと思ってます。是非またやって下さい。宜しくお願いします。（会場拍手）

安中：やりますよ一。（会場笑い）ほんとにこれは今年もやるつもりでした。これが札幌の、言わなくても呼び掛けなくても試合前のあの時間になったらみんながばあ一って立ち上がる様になれば、すげーいいな一と思ってる。只それが根付くには時間がかかるから、今は呼び掛けに回ったり。どうしてもちょっと時間が無いから、全部は回りきれない、特にドーム難しいんですけど。そういうのがカラーになれば選手にも力を与えらると思うし、そういう事をして、札幌のスタジアムってすげーな一って普通に思われたいんで。その結果、じゃちょっと札幌、次も行ってようかなみたいな感じで思ってくれる人が一人でも、一試合に一人でもいれば、それはこのクラブにとってもすごい良い事だと思うし。サポーターがサポーターを呼ぶ事も絶対に出来るはずなんで、クラブの為に出来る事だったら我々としてはある程度どんな事でもやってかなきゃいけないのかなとは思ってる。今後違う事にしろ何かスタジアムで一つになって出来る事があれば、是非ご協力頂

きたいなと思っております。宜しくお願いします。(会場拍手)

司会：で、暴走したらみんなで止めましょう。(会場笑い) それでは大体よろしいですか？15分位早いですが終わりとさせて頂いて。社長よろしゅうございますでしょうか。

矢萩：はい。

司会：はい。では。

上村：1点だけいいですか。

司会：はいどうぞ。

上村：私、USとは別に札幌赤黒連盟といいまして、サポーターで自主製作のコンサドーレの試合告知チラシを作っています。シーズン前だと白い恋人パークコレクションハウス内と丸井今井のCスペースさんに置かせて貰ってます。シーズン始りますと総合案内所に置かせて貰ってるんですけども、今年で4年目になりますが、毎回8,000枚位作ってるんですけども、どうしても最後まで捌ききれないんですよね。毎試合持って帰って頂いてる方もいらっしゃるんですけども、やっぱり残ってしまいますととても寂しいものがありますので是非使って頂けると。近所にポスティングとか、どっかに貼るとかして頂けると大変ありがたいので、宜しくお願いします。

司会：宜しくお願いします。では、すいませんが本物のコンサドーレコールを宜しくお願いします。それではご起立をお願い致します。サポ集で本物、とうとう来ちゃいました。

安中：その為に呼ばれたんじゃない？(会場笑い)

司会：そんなことはない。これはついで。

安中：や一、じゃ、ほんと俺。

司会：いやいや、写真撮ってるし。(会場笑い) 写真撮ってるし。

安中：や、俺ほんとに、ここに来るのでも結構奇跡だったはずなのに。(会場笑い)

司会：ありがとうございます。すいません。

安中：あ一。(会場笑い)

司会：いやいや写真撮ってるから。

安中：や、マイク要りませんよ、もう。(会場笑い)

司会：あーそうだよね、そうだよね。じゃお願いします。

安中：じゃいきましょーかー。(会場笑い)

司会：3回。3回です、3回。

安中：3回、はい。でもこれ。いいすか、そうですね。勢いが大事。えーと。

上村：前行って、前。(会場拍手) みんな寄って応援しようよ。(会場笑い) 寄って応援しよう。そうだろ、そうやってきたんだ。あ、すごい寄ってきた。もっと真ん中の方で。一緒にやっていきたいと思うんで。どっかで聞いた事ある。

安中：あの一ほんとに、今年1年目標は、なんだかんだ高い所目指したとしても現実には残留って事になると思うんですけど。苦しい時もあると思いますけど、去年の最終戦の雰囲気なんて、あんなの普通ですから。

司会：おー。

安中：あれが普通になる様に、今年1年宜しくお願いします。

会場全体：宜しくお願いします。

安中：コーンサドーレ！（手拍子）（会場全体で）コーンサドーレ！（手拍子）コーンサドーレ！（手拍子）コーンサドーレ！（手拍子）コーンサドーレ！（会場拍手）

司会：どうもありがとうございました。ではあの冬道滑りますので気を付けてお帰り下さい。お疲れ様でした。

安中：俺只でさえこんな人前に立つ事苦手なのに。

司会：いやいや、いいもん聞けた。試合じゃないし。お疲れ様でした。

— 終了 —